女子日本文法

保科孝一 著

東京 光風館書店 發行

42264
教科書文庫
4
815
42-1929
20000
45710

資料室

教科書文庫
4
815
42-1929
2000045710

375.9
H019

濟定檢省部文
用科教科語國校學女等高　日八月一年四和昭

東京高等師範學校教授
保科孝一著

女子日本文法

広島大学図書
2000045710

東京
光風館藏版

女子日本文法

目次

第一編　總　說……一頁
第一章　主語と述語……一
第二章　主語の成分……三
第三章　述語の成分……五
第四章　文の接續……八
第二編　品　詞……二
第一章　名　詞……二

廣島大學圖書之印

廣島大學教 45710 圖書

第二章　代名詞……一三
第三章　動詞……一九
一　正格活用の動詞……二一
二　變格活用の動詞……二九
三　形容動詞……三五
四　動詞の活用形……三七
第四章　形容詞……四六
一　久活用の形容詞……四七
二　志久活用の形容詞……四九
三　形容詞の活用形……五〇
第五章　副詞……五七
第六章　接續詞……六一
第七章　感動詞……六三
第八章　助動詞……六五

一　助動詞の活用……六七
二　助動詞の活用形……八七
第九章　助詞……九三
第十章　品詞の種類……九五
第三編　語と語の連續……九九
第一章　動詞・形容詞と助動詞・助詞との連續……九九
第二章　助動詞と用言との連續……一〇九
第三章　助詞の用法の一……一二三
第四章　助詞の用法の二……一三三
第五章　助詞の用法の三……一四一
第四編　文……一五八
第一章　文の成分……一五八

一　語句文……一五八
二　主語　形容詞　形容詞句　形容詞節……一五九
三　述語　副詞　副詞句　副詞節……一六四
四　補足語……一六九
第二章　文の構成……一七三
一　單文……一七三
二　複文……一七六
三　重文　合文……一七九
第三章　係　結……一八二
附　錄　文法上許容に關する事項……一

目次終

南京大學圖書之印

女子日本文法

保科孝一著

第一編　總說

第一章　主語と述語

雨降る。風吹く。雪飛ぶ。水流る。

森あり。花美し。色白し。

〔一〕右はいづれも或る思想を言ひあらはして居るもので、かやうに一つのまとまつた思想を言ひあらはすには、先づ第一に言ひあらはすべき目的物となるものと、第二にその目的物について言

ひあらはされる事柄が必要である。即ち**雨**・**風**・**雪**・**水**・**森**・**花**・**色**はその目的物となつて居るもので、**降る**・**吹く**・**飛ぶ**・**流る**・**あり**・**美し**・**白し**はその目的物について言ひあらはされた事柄である。

右のやうに或る思想の目的物となるものを**主語**といひ、その目的物について言ひあらはされる事柄を**述語**といふ。又主語と述語の結びついたものを**文**といふ。

主語
述語
文

練習

一　左の文例により主語と述語とを説明せよ。

1 雨やむ。
2 友人來る。
3 花散る。
4 遊客少し。
5 鐘聲聞ゆ。
6 旅宿あり。
7 色青し。
8 山高し。

二　國語讀本から主語と述語の結びついた文例を集めよ。

第二章　主語の成分

氷塊流れ來る。任務果つ。夜更けぬ。鳥眠る。
天氣變る。雷鳴はげし。

〔二〕右の**氷塊**・**任務**・**夜**・**鳥**・**天氣**・**雷鳴**はいづれも文の主語で、或る物

名詞

事を言ひあらはして居る。かやうに物事を言ひあらはすものを**名詞**といふ。

われ一人なり。汝行け。彼何ものぞ。こゝが大事なり。

代名詞

【三】右の**われ・汝・彼・こゝ**はいづれも文の主語で、或る物事の名稱の代りに用ゐられて居る。かやうに物事の名稱の代りに用ゐられるものを**代名詞**といふ。

體言

注意　名詞及び代名詞を總稱して**體言**ともいふ。

練習

左の文例について名詞及び代名詞を指示せよ。

1たとひ己が欲せざることなりとも、爲さざるべからざることは甘んじてわが情を屈し、わが氣を抑へてわが爲すべきことを爲さざるべからず。

2われ汝を彼に託せり。汝よくつとめて他日の大成を期すべし。

3ここはよいが、あそこはわるい。

第三章　述語の成分

動詞

花散る。鳥啼く。猫眠る。鐘聲聞ゆ。竹林あり。

【四】右の**散る・啼く・眠る・聞ゆ・あり**はいづれも文の述語で、動作又は存在を言ひあらはして居る。かやうに動作又は存在を言ひあらはすものを**動詞**といふ。

疾篤し。暑氣きびし。月色麗し。波高し。色美し。

【五】右の篤し・きびし・麗し・高し・美しはいづれも文の述語で、物事の性質等を言ひあらはして居る。かやうに物事の性質等を言ひあらはすものを**形容詞**といふ。

形容詞

周旋頗るつとむ。月たかく上る。母最も悲しむ。
疾甚だ篤し。責任一層重し。

【六】右の**頗る・たかく・最も・甚だ・一層**は動詞や形容詞の意味を修飾して居る。かやうに動詞や形容詞の意味を修飾するものを**副詞**といふ。

副詞

月出でたり。風も吹きぬ。日なほ高かりき。正成は忠臣なり。花も咲かむ。尙列國の輕侮を免れず。

【七】右の**たり・ぬ・き・なり・む・ず**は名詞・動詞及び其の他の語に結びついていろ〳〵の意味をあらはして居る。かやうに名詞・動詞及び其の他の語に結びついていろ〳〵の意味をあらはすものを**助動詞**といふ。

助動詞

注意　動詞・形容詞及び助動詞を總稱して**用言**ともいふ。

用言

練習

左の文例につきて動詞・形容詞・副詞及び助動詞を指示せよ。

1 援軍來らず、速に降るべし。

2 少しも悲しき色を見せざりき。

3 その味最も美なり。
4 倫敦は古き都市なり。
5 苦あれば必ず樂あり、樂あれば必ず苦あり。
6 學問を研究してその蘊奥を極むるは、固より學者の任なり。
7 諸國互に勢を爭ひたり。

第四章　文の接續

書を讀み且つ字を習ふ。春になりぬ、されど猶冬の心地す。諸車通行止、但し空車はこの限にあらず。英佛及び露は獨逸に宣戰したり。大佐又は少將。

【八】右の**且つ・されど・但し・及び・又**はは語句を結びつけて居る。

接續詞

助詞

かやうに語句を結びつけるものを**接續詞**といふ。

性質善良なれども、學力足らず。雨降れば、行かず。彼はいたく苦心せしが、その甲斐なかりき。花は櫻木、人は武士。東京より神戸まで行く。

【九】右の**ども・ば・は・が・より・まで**は語句を結びつけ、或は其の關係をあらはして居る。かやうに語句を結びつけ、或は其の關係をあらはすものを**助詞**といふ。

練習

一　左の文例中の助詞を指摘せよ。

道を行くにも、舟車に乘るにも、旅館に宿るにも、自ら公衆に對する禮

儀あり。衆人群衆の場處にて他人をおしのけ、汽車・汽船等の中にて我獨り廣き場處を占領し、旅館にて夜晩く高聲を發して、他人の安眠を妨ぐるが如きは、文明國民の爲すべきことにあらず。

二　國語讀本から接續詞の文例を集めよ。

名詞

第二編　品詞

第一章　名詞

扇を使へば風起り、鞭をふるへば音を發す。是我等の周圍に空氣のあればなり。

〔十〕右の扇・風・鞭・音・周圍・空氣は物事の名稱であるから、いづれも名詞である。

注意　笠置破れし後賊軍赤坂城を圍みしが、城遂におちいりしかば正成逃れてしばらく其の身をかくせり。

右の文例中、笠置・赤坂城・正成は或る一つのきまつた土地や人の名稱であるから、之を固有名詞といふ。土地の名や人の名などはすべて固有名詞

である。

又後・城・身はひろく同じ類のものに通じて用ゐられるものであるから、之を普通名詞といふ。

名詞の複數

〔十一〕名詞を複數にするには、山々・川々・國々・寺々・人々のごとく同語を繰返すこともあり、子ら・乙女ら・女學生たち・生徒たちのごとく「ら」「たち」等を結びつけることもある。

口語では人物に關する名詞に「がた」「たち」「ども」「ら」を結びつけて複數の意味をあらはし、それ〴〵身分に應じて用ゐられる。

奥様がたはまだ御出になりません。

生徒たちは大層元氣です。

車夫どもの言葉が實にきたない。

子供らはもう行きました。

練習

一　左の文例から固有名詞と普通名詞を摘出せよ。

1 ナポレオンがモスコーより退軍せし時、ロシヤの狼は、行く〴〵雪中に倒るゝ佛兵の後を追ひて、中部獨逸にまで來りしことあり。

2 コロンブスは初より世界は球形なりと信じ、ヨーロッパの西海岸より西を指して進まば、印度の東海岸に到着すべしとの意見を抱けり。

二　「がた」「たち」「ども」「ら」を結びつけて名詞の複數を作れ。

第二章　代名詞

汝よく此の書を學ばゞ、遂に王者の師たらむ。十餘年の後我また汝を見るべし。

これを聞くもの誰かは感激せざるものあらん。

代名詞

〔十二〕右の**汝**・**此**・**の**・**我**・**これ**・**誰**は物事の名稱の代りに用ゐられるものでいづれも**代名詞**である。

代名詞に人物の名稱の代りに用ゐられるものと、事物・場所・方角を指示してその名稱の代りに用ゐられるものとある。

われ既に老いたり。

これ偏に汝の力による。

わらはも君の例にならはむ。

彼も同意見なり。

誰にか問はむ。

人代名詞

〔十三〕右の**われ**・**汝**・**わらは**・**君**・**彼**・**誰**は人物の名稱の代りに用ゐられるもので、これを**人代名詞**といふ。

口語の人代名詞は「わたくし」「わたし」「自分」「僕」「あなた」「おまへ」「あれ」「あのひと」「あのかた」「だれ」「どなた」「どのかた」等である。

人代名詞の複數

〔十四〕人代名詞を複數にするには、**われら**・**汝ら**・**かれら**・**某ら**のごとく「ら」を結びつけることがある。

口語では人代名詞の複數をあらはすのに「われ〳〵」の如く同語を繰返すこともあり、又「あなたがた」「自分たち」「私ども」「おまへら」の如く「がた」

「たち」「ども」「ら」を結びつけることもある。

これよりも寧ろかれを選ばむ。

この人もかの人も學生なり。

こゝにもかしこにもあり。

いづれか我が住家ぞと立ち惑ふ。

たま〳〵こゝかしこに殘る家に人住めり。

いづこに宿らんあてもなし。

いづち行きけん影だに見えず。

〔十五〕右のこれ・かれ・この・かの・こゝ・かしこ・いづれ・こゝ・かしこ・いづこ・いづちは事物・場所・方角を指示して、その名稱の代りに用ゐられるものゞ、これを指示代名詞といふ。

右の中これ・かれ・この・かの・いづれは事物、こゝ・かしこ・こゝ・かしこ・いづこは場所、いづちは方角を指示するものである。

注意　「この」「かの」「あの」「その」は「こ」「か」「あ」「そ」に助詞の「の」が結びついたものである。又「これ」「それ」の「こ」「そ」は「こは」「そを」のごとく獨立にも用ゐられる。

練習

一　左の文例から人代名詞を摘出せよ。

1 汝が只今の振舞あらはれなば、われよりも罪重からん。われ飯を食ひたりとて命助かるべきにあらず。

2 故傍山の東南に橿原神宮あり。こゝに詣づるもの、誰かはそのかみ

を思ひ出でゝ、皇室の御威德を仰がざらむ。

3 おまへが今學問をやめるのは、私が今この機を切つてしまふのと同じだ。

二　左の文例中事物・場所・方角を指示する代名詞を指摘せよ。

1 この麓を過ぐるに、山の靈水の流の面白さに思はずもこゝに詣づ。

2 かれの繁華に代ふるにこれの幽趣あり。

3 そはこの爲の御蔭なり。

4 岸の此方にて眺むる人ありかなたの坂を登りゆく人あり。

5 百姓家はあちらにもこちらにも散らばつてゐる。

6 そこに警告として一枚の紙がある。

7 まさかこゝから亞弗利加の沙漠の見渡せるわけもあるまい。「どこに砂があるか」と聞くと、「此の紅海の空を蔽うてゐるのは皆あそこの沙漠の砂だ」といふ。

第三章　動詞

風吹く。

雨降る。

鳥空を飛ぶ。

猫塀の上に眠る。

子三人あり。

〔十六〕右の吹く・降る・飛ぶ・眠る・ありは動作又は存在をあらはすものゝ、いづれも動詞である。その中吹く・降る・飛ぶ・眠るは動作、あり

は存在をあらはす。

花見に行かむ。

學校へ行きたり。

京都へ行く。

又行く折もなからん。

急ぎて行けば、間に合ふべし。早く行け。

動詞の活用

〔十七〕右の文例における**行く**といふ動詞は、用ゐ方によつて語形が**行カ・行キ・行ク・行ク・行ケ・行ケ**と變化する。動詞は用ゐ方によつて語形がいろ〳〵に變化するが、かゝる語形の變化を**動詞の活用**といふ。動詞の活用に**正格活用**と**變格活用**の二種がある。

四段活用

一　正格活用の動詞

こゝに待たむ。　終日まちたり。　手紙を待つ。

他に待つものなし。　待てば海路の日和。　しばし待て。

〔十八〕右の動詞**待つ**は**待タ・待チ・待ツ・待ツ・待テ・待テ**と語形が變化する。かやうに語形の變化するものを**四段活用**といふ。

四段活用の動詞は次のやうに活用する。

書	押	打	問
カ	サ	タ	ハ
キ	シ	チ	ヒ
ク	ス	ツ	フ
ク	ス	ツ	フ
ケ	セ	テ	ヘ
ケ	セ	テ	ヘ

任	貪
マ	ラ
ミ	リ
ム	ル
ム	ル
メ	レ
メ	レ

月を見む。書を見て樂しむ。花を見る。
他に見るものなし。人を見れば吠ゆ。花を見よ。

【十九】右の動詞見るは見・見・見ル・見ル・見レ・見と語形が變化する。かやうに語形の變化するものを上一段活用といふ。

上一段活用

上一段活用の動詞は次ぎのやうに活用する。

射
イ
イ
イル
イル
イレ
イ

用	見	干	煮	着
ヰ	ミ	ヒ	ニ	キ
ヰ	ミ	ヒ	ニ	キ
ヰル	ミル	ヒル	ニル	キル
ヰル	ミル	ヒル	ニル	キル
ヰレ	ミレ	ヒレ	ニレ	キレ
ヰ	ミ	ヒ	ニ	キ

注意　「用」を「用ヒ・用ヒ・用フ・用フル・用フレ・用ヒ」と活用させる人もある。「飽く」「借る」「足る」は四段活用の動詞であるが、口語ではこれを上一段に活用させる地方が少くない。

鞠を蹴む。鞠を蹴たり。鞠を蹴る。

・鞠を蹴る人あり。鞠を蹴れば足疲る。
鞠を蹴よ。

下一段活用

〔三十〕右の動詞蹴るは蹴・蹴・蹴ル・蹴ル・蹴レ・蹴と語形が變化する。かやうに語形の變化するものを下一段活用といふ。下一段活用の動詞は「蹴」一語のみである。

「蹴」
ケ
ケ
ケル
ケル
ケレ
ケ

下一段活用の動詞は四段活用に用ゐる地方もある。

本年も試みむ。再び試みたり。熱心に試む。終夜試むることあり。絶えず試むれば可なり。明日も試み

よ。

上二段活用

〔三十一〕右の動詞試むは試ミ・試ミ・試ム・試ムル・試ムレ・試ミと語形が變化する。かやうに語形の變化するものを上二段活用といふ。上二段活用の動詞は次のやうに活用する。

起	落	强	恨	老
キ	チ	ヒ	ミ	イ
キ	チ	ヒ	ミ	イ
ク	ツ	フ	ム	ユ
クル	ツル	フル	ムル	ユル
クレ	ツレ	フレ	ムレ	ユレ
キ	チ	ヒ	ミ	イ

懲
リ
リ
ル
ルル
ルレ
リ

上二段活用の動詞は口語では上一段活用に用ゐられる。

註意　「恨ム」を四段活用の動詞として用ゐることは、現代文において許容される。

賞を授けむ。位階を授けたり。勳章を授く。戒を授くる日近づく。みだりに恩賞を授くれば害あり。速に授けよ。

下二段活用

〔三十二〕　右の動詞**授く**は**授ケ・授ケ・授ク・授クル・授クレ・授ケ**と語形が變化する。かやうに語形の變化するものを**下二段活用**といふ。

下二段活用の動詞は次ぎのやうに活用する。

「得」	エ	エ	ウ	ウル	ウレ	エ
受	ケ	ケ	ク	クル	クレ	ケ
載	セ	セ	ス	スル	スレ	セ
出	デ	デ	ヅ	ヅル	ヅレ	デ
尋	ネ	ネ	ヌ	ヌル	ヌレ	ネ
與	へ	へ	フ	フル	フレ	へ
改	メ	メ	ム	ムル	ムレ	メ
消	エ	エ	ユ	ユル	ユレ	エ
恐	レ	レ	ル	ルヽ	ルレ	レ
植	エ	エ	ウ	ウル	ウレ	エ

下二段活用の動詞は口語では下一段活用に用ゐられる。

正格活用

【三十三】以上の四段活用・上一段活用・上二段活用・下一段活用・下二段活用の五種を**正格活用**といふ。

四段活用・上一段活用・下一段活用は口語においても同じであるが、上二段活用は上一段活用に、下二段活用は下一段活用に變化したから、口語における正格活用は四段活用・上一段活用・下一段活用の三種である。

練習

左の動詞はいかに活用するか。

似る　舞ふ　裂く　始む　促す　勝つ　明く　鑄る　枯らす

恥づ　召す　育つ　商ふ　閉づ　誘ふ　生ふ　費やす　率ゐる

延ぶ、綻ぶ　罵る　折る　堪ふ　聳ゆ　諫む　拜む　馴る

二　變格活用の動詞

秋にも又來む。　横濱へ來て一泊す。

海賊追ひ來。　又來る折もあらむ。

春來れば花咲く。　はやく來よ

加行變格活用

【三十四】右の動詞**來**は**來・來・來・來・來ル・來レ・來**と語形が變化する。かやうに語形の變化するものを**加行變格活用**といふ。

加行變格活用の動詞は「來」一語のみである。

「來」
コ
キ
ク
クル
クレ
コ

加行變格活用の動詞は口語では**コ・キ・クル・クル・クレ・コ**と活用する。

花見をせむ。　出世をして親を喜ばす。
兄と旅をす。　勉強をする折もなし。
手習をすれば心を慰む。　勉強をせよ。

佐行變格活用

〔二十五〕右の動詞爲は爲・爲・爲・爲ル・爲レ・爲と語形が變化する。かやうに語形の變化するものを**佐行變格活用**といふ。

「爲」
セ
シ
ス
スル
スレ
セ

佐行變格活用の動詞は口語において**セ・シ・スル・スル・スレ・セ**又は**シ・シ・スル・スル・スレ・シ**と活用する。漢語又は國語の名詞を動詞として用ゐる場合に、文語では左の如くすべて之を佐行變格に活用する例である。

彼も大に運動せむ。
衆議つひに決せず。
豫算は甚しく減じたり。
熱心に手習したれば大に上達したり。

然るに口語ではこの慣用が左の通區々である。

勉強	セ	シ	スル	スル	スレ	セ
察	シ	シ	シル	シル	シレ	シ
案	ジ	ジ	ジル	ジル	ジレ	ジ
議	サ	シ	ス	ス	セ	セ

もろともに死なむ。　この春死にたり。

人よりも遲く死ぬ。　死ぬる時に苦しみたり。
彼死ぬれば血統絶ゆ。　われとともに死ね。

奈行變格活用

【三十六】右の動詞死ぬは死ナ・死ニ・死ヌ・死ヌル・死ヌレ・死ネと語形が變化する。かやうに語形の變化するものを**奈行變格活用**といふ。

死
ナ
ニ
ヌ
ヌル
ヌレ
ネ

注意「死ヌ」を四段活用の動詞として用ゐることは現代文において許容される。又口語では奈行變格活用の動詞が四段活用に變つた。

別條あらず。　昨日通知ありたり。

良行變格活用

兄弟三人あり。　異變ある場合に備ふ。
差支あれば御一報を乞ふ。　願くは君に幸あれ。

【三十七】右の動詞ありはアラ・アリ・アリ・アル・アレ・アレと語形が變化する。かやうに語形の變化するものを**良行變格活用**といふ。

あ
ラ
リ
リ
ル
レ
レ

注意　良行變格活用の動詞「居り」を四段活用に用ゐることは現代文において許容される。又口語では良行變格活用の動詞が四段活用に變つた。

變格活用

【三十八】以上の加行變格活用・佐行變格活用・奈行變格活用及び良行變格活用の四種を**變格活用**といふ。

奈行變格活用及び良行變格活用は口語では四段活用に變化したから、口語における變格活用は加行變格活用と佐行變格活用の二種である。もつとも關東東北地方では佐行變格活用の動詞を佐行上二段活用に用ゐる。

練習

一　左の文例の中から變格活用に屬する動詞を摘出せよ。

1 人皆往にけり。
2 余は終夜公の病床に侍りき。
3 敵艦大破して全滅に歸したり。
4 隨分勉强をしたので首尾よく及第した。
5 ペンギンは北の方から泳いで渡つて來るのである。

二　左の如き漢語や國語の名詞を動詞として用ゐる場合の活用を示せ。

散歩　旅行　達　關　評　命　感　信　論　辭　浴　祝　噂　手習

三　形容動詞

風なく波靜なり。　月色明なり。
春光麗なり。　將士皆憮然たり。
濁流滔々たり。

〔三十九〕　右の靜なり・明なり・麗なり・憮然たり・滔々たりは物事の性質又は狀態を言ひあらはして居る。これは動詞の一種として取扱はれるもので形容動詞といふ。

形容動詞は良行變格活用の動詞と同樣に活用する。

曖	ナラ
	ナリ
	ナリ
	ナル
	ナレ
	ナレ
堂々	タラ
	タリ
	タリ
	タル
	タレ
	タレ

形容動詞は口語において「明デ」「明ダ」「穏デ」「穏ダ」あるひは「明デ」「明デアル」、「僅デ」「僅デアル」といふやうに用ゐられる。

練習

一　左の文例の中から形容動詞を摘出せよ。

1 春の空はいと長閑なり。

2 穏なる海上鏡のごとし。

3 之を聞いて衆皆呆然たり。

4 滔々たる弊風その底止する所を知らず。

5 野仕事の間の午下りが朝の如く静である。

動詞の活用形

四　動詞の活用形

〔三十一〕　動詞は用ゐ方によつていろ〳〵に活用するが、其の活用に六種あつて、これにそれ〴〵特殊な名稱が與へられて居る。次ぎにその各〴〵の活用形について説明する。

雨降らば行かじ。　鞠を蹴む。　今年は試驗を受けむ。　後見をせむ。　恐らくは異變あらむ。

將然形

〔三十二〕　右の降ラ・蹴・受ケ・セ・アラのやうに未然の意味又は假定の條件をあらはす場合に用ゐられるものはこれを**將然形**といふ。

昨夜芝居を見たり。老いし後は子に從ふ。褒賞を授けぬ。友人と遊びに來たり。ありて甲斐なき命なりけり。

連用形

【三十二】右の見・老イ・授ケ・來・アリのやうに助動詞又は助詞に連ねて用ゐられるものは、これを**連用形**といふ。

書を讀み、字を習ふ。

鳥歌ひ花笑ふ。

中止形

【三十三】右の文例におけるが如く、この活用形で一旦語句を切ることがあるので、これを**中止形**ともいふ。又「友人ノ招キヲ受ケタリ。」「人ノ好ミニヨリテ同ジカラズ。」の如く、この活用形を名詞のやうにも用ゐることがある。

注意　「泣キ顔」「笑ヒ話」「朝起キ」「霜枯レ」「讀ミ書キ」「往キ還リ」「降リ續ク」「待チ遠シ」のごとく連用形でいろ〳〵の熟語を形作るからこれを熟語形ともいふ。

終止形

溫泉へ行く。芝居を見る。信用全く地に墜つ。

海賊追ひ來。子三人あり。

【三十四】右の行ク・見ル・墜ツ・來・アリのやうに、文の終りに用ゐられるものは、これを**終止形**といふ。

又用ゐる時もあらむ。その恨盡くる期なし。助くる

神あり。重ねて來る時を待て。心あるものは眉をひそめぬ。

連體形

〔三十五〕右の用ヰル・盡クル・助クル・來ル・アルのやうに體言に連ねて用ゐられるものは、これを連體形といふ。

動詞の終止形と連體形とは文語の四段活用・上一段活用・下一段活用では同じ形であるが、其の他の活用では違ふ。然るに口語ではすべての動詞を通じてこの活用形が同じになつた。

雨降れば行かず。足をあげて蹴れば忽ち仆る。人觸るれば人を斬る。かゝる行をすれば必ず害あり。虎死ぬれば皮を殘す。

已然形

〔三十六〕右の降レ・蹴レ・觸ルレ・スレ・死ヌレのやうに既定の條件を言ひあらはすものは、これを已然形といふ。

文語の將然形「雨降らば」と已然形の「雨降れば」とは、口語では同じ形になつて兩方とも「雨降れば」といふ。故に未然か已然か、或は假定か既定かは文章の意味で判斷しなければならない。又口語ではこれと同じ意味を有する次ぎのやうな形式が發達して居る。

雨が降ると行かない。　雨が降ると行かないだらう。

雨が降つたら行かない。　雨が降つたら行かないだらう。

早く讀め。着物を着よ。朝早く起きよ。櫻見に來よ。

とく〳〵往ね。君の前途に幸あれ。

命令形

【三十七】右の讀メ・着ヨ・起キヨ・來ヨ・往ネ・アレのやうに命令の意味をあらはすものは、これを命令形といふ。

右の中四段活用・奈行變格活用及び良行變格活用の動詞はエ列の音でそのまゝ命令になり、其の他の動詞は將然形に「よ」を結びつけて命令になる。

口語では四段活用の動詞はエ列の音で命令になるが、其の他の動詞では將然形に「よ」又は「ろ」が結びついて命令になる。但し加行變格活用の命令形は「來い」、佐行變格活用の命令形は「せよ」又「しろ」である。

動詞の活用圖

【三十八】動詞の活用形を圖に示せば左の通。

	行	見	蹴	起	受	來	爲	死
	四段活用	上一段活用	下一段活用	上二段活用	下二段活用	カ變活用格行	サ變活用格行	ナ變活用格行
將然形	カ	ミ	ケ	キ	ケ	コ	セ	ナ
連用形	キ	ミ	ケ	キ	ケ	キ	シ	ニ
終止形	ク	ミル	ケル	ク	ク	ク	ス	ヌ
連體形	ク	ミル	ケル	クル	クル	クル	スル	ヌル
已然形	ケ	ミレ	ケレ	クレ	クレ	クレ	スレ	ヌレ
命令形	ケ	ミ(ヨ)	ケ(ヨ)	キ(ヨ)	ケ(ヨ)	コ(ヨ)	セ(ヨ)	ネ

有
ラ變活用格行
ラ
リ
リ
ル
レ
レ

口語動詞の活用形を圖に示せば左の通。

	書	起	解	「來」	「爲」
	四段活用	上一段活用	下一段活用	カ變活用格行	サ變活用格行
將然形	カ	キ	ケ	コ	セ シ
連用形	キ	キ	ケ	キ	シ
終止形	ク	キル	ケル	クル	スル
連體形	ク	キル	ケル	クル	スル
已然形	ケ	キレ	ケレ	クレ	スレ
命令形	ケ	キ（ヨ）（ロ）	ケ（ロ）（ヨ）	コ（イ）	セ（ヨ） シ（ロ）

關東東北地方では左行變格活用の動詞が左行上二段活用に用ゐられる。

練習

一　左の文例中より動詞を摘出し、その活用形について說明せよ。

1　屋後に一株の銀杏あり。秋深くしては滿樹黃金よりも黃なり。木枯の風起れば、その葉翩々として翻り落つ。夜半夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戸を開けば、庭は一夜に黃金となりぬ。屋根も庇も手水鉢も處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人はいふなる錦を我は庭に敷きつめぬ。

2　一人の茶道坊主嘗てその士の恩を受けたることありしが、今この有樣を痛み夜潛に燒飯を携へ行きて與へたり。

二　左の動詞の活用形に誤あらば正せ。

綻バ　ビ　ブ　ブル　ブレ　ビ
用ヒ　ヒ　ウ　ウル　ウレ　ヒ
植エ　エ　ウ　ウル　ウレ　エ
達セ　セ　ス　スル　スレ　セ
任セ　シ　ス　スル　スレ　セ
考エ　エ　ユ　ユル　ユレ　エ
強キ　キ　キル　キル　キレ　キ

第四章　形容詞

神澄み氣清し。寒氣頗る強し。
高き波寄せ來る。終夜烈しき風吹く。

〔三十九〕右の清し・強し・高き・烈しきは物事の性質等を言ひあらはして居るもので、いづれも形容詞である。

重くば休息せん。病重く頗る氣づかはし。
その任や頗る重し。重き職に就く。
病重ければ皆憂色あり。

〔四十〕右の文例における重しといふ形容詞は用ゐ方によつて語形が重ク・重ク・重シ・重キ・重ケレと變化する。形容詞は用ゐ方によつて語形がいろ〳〵に變化するが、かゝる語形の變化を形容詞の活用といふ。形容詞の活用に久活用と志久活用の二種ある。

一　久活用の形容詞

遠くば車をやとはむ。島影遠く舟近し。
日暮れて道遠し。遠きものは音にも聞け。
程遠ければしばしいこひぬ。

久活用

〔四十一〕右の形容詞遠しは遠ク・遠ク・遠シ・遠キ・遠ケレと語形が變化する。かやうに語形の變化するものを久活用といふ。

久活用の形容詞は次ぎのやうに變化する。

深低善
ク
ク
シ
キ
ケレ

口語では久活用の形容詞は語形が善ク・善ク・善イ・善イ・善ケレと變化する。

二　志久活用の形容詞

御顏麗しくばいかに嬉しからむ。空麗しく氣澄めり。
花いと麗し。麗しき花咲きぬ。心麗しければ德自ら備はる。

志久活用

〔四十二〕右の形容詞麗しは麗シク・麗シク・麗シ・麗シキ・麗シケレと語形が變化する。かやうに語形の變化するものを志久活用といふ。

志久活用の形容詞は次ぎのやうに活用する。

烈惡寂
シク
シク
シ
シキ
シケレ

口語では志久活用の形容詞が烈シク・烈シク・烈シイ・烈シイ・烈シケレと活用する。

注意　右の外古代文には明ケク・明ケシ・明ケキといふやうに活用する形容詞が多少ある。

練習

一　左の形容詞はいかに活用するか。

赤し　堅し　淺し　新し　悲し　白し　高し　睦し　近し　廣し　美し　樂し　珍し　長し　弱し　恥かし　男々し

二　左の形容詞を用ゐて口語の文例を作れ。

はげし　女々し　嬉し　著し　忙し

三　形容詞の活用形

形容詞の活用形

【四十三】　形容詞は用ゐ方によつていろ〳〵に活用するが、その活用に五種あつて、これにそれ〴〵特殊な名稱が與へられて居る。次ぎにその各〴〵の活用形について說明する。

遠くば車をやとはむ。　都合よくば來たまへ。

新しくば買はむ。　寂しくば早く歸らむ。

將然形

【四十四】　右の遠ク・善ク・新シク・寂シクのやうに、假定の條件をあらはすものは、これを將然形といふ。

山高くともけはしからず。　夏涼しくて冬暖し。　厚く禮を述ぶ。　風烈しく吹く。

連用形

副詞形

〔四十五〕右の**高ク・涼シク**のごとく助詞に連ねて用ゐられるものは、これを**連用形**といふ。又**厚ク・烈シク**のごとく副詞として用ゐられる場合には、これを**副詞形**といふ。

中止形

山高く、水清し。

色白く、脊高し。

〔四十六〕右の文例におけるが如く、この活用形で一旦語句を切ることがあるので、これを**中止形**ともいふ。

口語における連用形も大抵同じやうに用ゐられる。但し對話の場合に、この中止形を「山ガ高クテ、水ガ清イ。」「山モ高ケレバ、水モ清イ。」「山モ高イシ、水モ清イ。」といふやうに言ひあらはす。又「ございます」に結びつく場合には必ず、

大層お暑うございます。　お早うございます。

宜しうございます。

といふやうにこの活用形の語尾の「ク」が「ウ」に變化する。其の外「善ウコソ御出下サイマシタ。」「有リガタウ存ジマス。」といふやうに、或は單に「御早ウ。」「オ芽出タウ。」といふやうに用ゐることもある。

終止形

山高く水清し。　帶に短し、襷に長し。　川風いと涼し。

物資全く空し。

〔四十七〕右の**清シ・短シ・長シ・涼シ・空シ**のやうに文の終に用ゐられるものは、これを**終止形**といふ。

連體形

善き日に式を擧げむ。　堅き約束を結びぬ。
面白き相樸を見たり。　珍しき品を送り來る。

〔四十八〕　右の善キ・堅キ・面白キ・珍シキのやうに體言に連ねて用ゐられるものは、これを**連體形**といふ。

口語においては、形容詞の終止形と連體形が動詞における場合のごとく全く同じ形に變つた。

疾輕ければ安心なり。　價高ければ買はず。　夏涼しければ來客多し。　身分賤しけれども行正し。

〔四十九〕　右の輕ケレ・高ケレ・涼シケレ・賤シケレのやうに既定の條件を言ひあらはすものは、これを**已然形**といふ。

已然形

文語の將然形「都合よくば」と已然形「都合よければ」とは口語では同じ形になつて、兩方とも「都合よければ」といふ。故に未然か已然か、或は假定か既定かは文章の意味で判斷しなければならん。

形容動詞ノ一種

〔五十〕　形容詞に良行變格活用の動詞「あり」が結びついて次ぎのやうに活用する。これは形容動詞として取扱ふ。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
深	カラ	カリ	カリ	カル	カレ	カレ
烈	シカラ	シカリ	シカリ	シカル	シカレ	シカレ

形容詞ノ活用圖

〔五十一〕形容詞の活用形を圖に示せば左の通。

	赤寒近	忙怪睦
	久活用	志久用
將然形	ク	シク
連用形	ク	シク
終止形	シ	シ
連體形	キ	シキ
已然形	ケレ	シケレ

口語の形容詞の活用形を圖に示せば左の通。

	遠	寂
	久活用	志活用
將然形	ク	シク
連用形	ク	シク
終止形	イ	シイ
連體形	イ	シイ
已然形	ケレ	シケレ

練習

左の文例における形容詞の活用形について説明せよ。

1 峰高くして道細く、山險しくして苔滑かなり。

2 たゞ假の庵のみ長閑かにして恐なし。

3 命長ければ恥多しといへり。

4 いと口惜しけれど、思ふに任せず。

5 敵をはげしく攻撃せり。

6 品が善ければ買ひませう。

7 苦しいときの神だのみ。

第五章　副詞

大に敵を敗る。　事業盛に起る。
久しく君を見ず。　疾頗る篤し。
彼の責任最も重し。

副詞ノ一

〔五十二〕　右の大に盛に久しく頗る最もは動詞や形容詞を修飾して居るもので、いづれも副詞である。

更に一層困難を增したり。　少し靜に讀め。
非常に早く來れり。

副詞ノ二

〔五十三〕　右の更に少し非常には他の副詞を修飾して居るものでやはり副詞である。

畢竟天佑の致すところなり。
惟ふに我が國體の精華は他に比類なし。
要するに問題とすべきものなし。

副詞ノ三

〔五十四〕　右の畢竟惟ふに要するには語句を修飾して居るものでこれもやはり副詞である。

〔五十五〕　以上の如く副詞は動詞・形容詞及び他の副詞を修飾し、また場合によつては語句をも修飾するものである。

注意　副詞のあるものには左の如く一種の呼應を有するものがある。

豈に……んや
況んや……をや

をさ〳〵……ず
ゆめ〳〵……ず
須らく……べし

練習

一　左の文例における副詞は何を修飾して居るか。

1　昔神武天皇此處に皇基を定め給ひしより、今に至るまで殆ど三千年君臣の分極めて明かに父子の親甚だ厚し。

2　學問を樂しむ風のないのは、單に學問の進歩の爲に遺憾であるばかりでなく、社會の風尚を高める上にも誠に殘念である。

二　左の副詞を用ゐて文例を作れ。

豈に　蓋し　流石に　況んや　ゆめ〳〵　須らく　具さに

接續詞

第六章　接續詞

大和には名勝多し。されば遊覽の客常に絶えず。

日既に暮れぬ。されど宿るべきところもなし。

毛筆又は鉛筆にて認むべし。

霞か雲かはた雪か。

【五十六】　右のされば・されど・又は・はたは語句を結びつけて居るもので、いづれも接續詞である。

注意　左の如く用ゐられるものは接續詞でなくして副詞である。

且つ食ひ且つ飲む。

或は論じ或は語る。

接續詞として普通に用ゐられるものは、右の外

或は　かくて　而して　若くは　然のみならず　然りといへども

然れども　然しながら　然るに　はた又　且又

等であるが、口語には、

それのみならず　けれども　それだから　それですから　そして

さうして　さうすると　そこで　ところが　それでは　それなら

それから

といふやうな語も接續詞として用ゐられる。

練習

一　左の接續詞を用ゐて文例を作れ。

且つ　しかのみならず　かくて　若くは　將又　且又　さりながら　そこで　ところが　それですから

二　國語讀本から口語の接續詞の用例を集めよ。

第七章　感動詞

あゝ、悲しいかな。

あら、おもしろや。

あな、いさましの軍神。

はや、十六才になりぬ。

あはれ、今年の秋もいぬめり。

【五十七】　右のあゝ・あら・あな・はや・あはれは感情を言ひあらはしたものゝ、これを感動詞といふ。

感動詞ノ二

喜怒・哀樂又は驚愕・恐怖等の感情によつて發せられる音聲はすべて感動詞である。

やあ〳〵、者ども出合へ〳〵。

やよ、待て、しばし。

いな、こは片腹痛し。

おう、その事にて候。

〔五十八〕右のやあ〳〵、やよのごとく人の注意を促したり、人を呼掛けたり、或はいな、おうのごとく應答したりするときに用ゐられる語もやはり感動詞である。

練習

左の文例の中から感動詞を摘出せよ。

1 いざ書き給へ。

2 いかに申候。

3 いでや思ふこと書き記してん。

4 おや大變でしたね。まあどうしたらいゝでせう。

5 いゝえ叔父様には知らせずに參りました。

第八章　助動詞

慶長五年の事なり。

羣れ飛ぶ鷗落花の風に飄るに似たり。

衆人の中にて辱しめらる。

助動詞

昔はさることもありけむ。

かたはらに人なきごとし。

〔五十九〕 右の**なり**・**たり**・**らる**・**けむ**・**ごとし**は名詞・動詞及び形容詞等に結びついて、いろ〳〵の意味を言ひあらはして居るもので、いづれも**助動詞**である。

父に褒められむ。

賞品を授けられたり。

衆人に辱しめらる。

忘れらるゝ事もあらむ。

主辱しめらるれば臣死す

助動詞ノ活用

〔六十〕 右の文例におけるらるといふ助動詞は用ゐ方によつてラレ・ラレ・ラル・ラル・ラルレと語形が變化する。助動詞は用ゐ方によつて大抵語形が變化するが、かゝる語形の變化を**助動詞の活用**といふ。

一　助動詞の活用

父に叱らる。

陣地を奪はる。

攻撃せしめられたり。

恩を仇にて報いらる。

受身ノ助動詞

〔六十一〕 右の**る**・**らる**は動詞及び助動詞に結びつき、或るものが他のものから動作を受ける意味をあらはすもので、これを**受身の助動**

詞といふ。

受身の助動詞はつぎのやうに活用する。

る	レ	レ	ル	ル、	ルレ	レ
らる	ラレ	ラレ	ラル	ラル、	ラルレ	ラレ

口語における受身の助動詞は「れる」「られる」で、左の通活用する。

れる	レ	レ	レル	レル	レ、	レ
られる	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレ、	ラレ

英文は讀まる。

湯水も飲まれず。

可能ノ助動詞

朝六時には起きらるべし。

本年は試驗を受けさせられむ。

〔六十三〕右の**る・らる**は動詞及び助動詞に結びつきて能力をあらはす場合に用ゐられるもので、これを**可能の助動詞**といふ。

可能の助動詞は次ぎのやうに活用する。

る	レ	レ	ル	ル、	ルレ	○
らる	ラレ	ラレ	ラル	ラル、	ラルレ	○

口語における可能の助動詞は「れる」「られる」で、左の通活用する。

れる	レ	レ	レル	レル	レ、	○
られる	ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレ、	○

騎兵馬を走らす。

本を讀ます。

生徒に問題を考へさす。

友人に周旋せさす。

休暇中家に歸らしむ。

庭に松を植ゑしむ。

使役ノ助動詞

【六十三】右のす・さす・しむは動詞に結びつき、或るものが他のものに動作を行はせる意味をあらはすもので、これを**使役の助動詞**といふ。

使役の助動詞は次ぎのやうに活用する。

す	セ	セ	ス	スル	スレ	セ
さす	サセ	サセ	サス	サスル	サスレ	サセ
しむ	シメ	シメ	シム	シムル	シムレ	シメ

口語における使役の助動詞は「せる」「させる」で、左の如く活用する。但し「しむ」は消滅した

せる	セ	セ	セル	セル	セレ	セ
させる	サセ	サセ	サセル	サセル	サセレ	サセ

楠木正成は忠臣なり。

親の恩は子を持ちて知るなり。

君君たり臣臣たり。

指定ノ助動詞

〔六十四〕右のなりは體言及び用言に、たりは體言に結びつき、確實に或は確實なるものとして、或る意味を言ひあらはす場合に用ゐられるもので、これを指定の助動詞といふ。

指定の助動詞は次のやうに活用する。

なり	ナラ	ナレ
	ナリ	
	ナリ	
	ナル	
	ナレ	
	ナレ	
たり	タラ	タレ
	タリ	
	タリ	
	タル	
	タレ	
	タレ	

注意　「秋の野に人まつ蟲の聲すなり」「秋風に初雁がねぞ聞ゆなる」の「なり」は咏歎の意味をあらはすもので指定の「なり」と違ふ。

口語における指定の助動詞は「だ」「である」で、左の如く活用する。

だ	デ ノデ	ダ ノダ
である	デ ノデ	デアル ノデアル

夢や見給ふらむ。

あなたこなたをさ迷ふめり。

人の心は長閑からまし。

山の紅葉も今は散るらし。

今日中に決定すべし。

最期の御有様をも見奉るべし。

推量ノ助動詞

〔六十五〕右のらむ・めり・まし・らし・べしは動詞や助動詞に結びついて推量の意味をあらはすもので、これを推量の助動詞といふ。

べしは右の外左の如く指定・決意・命令及び可能の意味をあらはす場合にも用ゐられる。

報告を提出すべし。（報告ヲ提出スルノデス。）　指定

予は斷然處決すべし。（予ハ斷然處決シマス。）　決意

明日中に出發すべし。（明日中ニ出發ナサイ。）　命令

夕刻までには書き終るべし。（夕刻マデニハ書キ終ルコトガ出來マス。）　可能

「べし」と良行變格活用の動詞「あり」と結びついて「行クべカラズ」「行クべカリシニ」といふやうに用ゐられることがある。

推量の助動詞は次ぎのやうに活用する。たゞし「らし」は活用しない。

らむ			
めり		ラム	ラメ
べし	ベク	メリ	メル
まし	ベク	ベシ	メレ
		ベキ	ベケレ
	マシ	マシ	マシカ

口語における推量の助動詞は「らしい」「だらう」で、「らしい」は左の如く活用し、「だらう」は活用しない。

らしい	ラシク	ラシク	ラシイ	ラシイ	○

誰も皆この様にありたし。

河豚は食ひたし、生命は惜しゝ。

願望ノ助動詞

【六十六】右の**たし**は動詞及び助動詞に結びついて希望の意をあらはすもので、これを**願望の助動詞**といふ。

願望の助動詞は次ぎのやうに活用する。

たし	
タク	
タク	タシ
タキ	タケレ

「たし」と良行變格活用の「あり」と結びついて「行キタカラム。」「行キタカルベシ。」といふやうに用ゐられることがある。

口語に於ける願望の助動詞は右と同じ「たい」で、左の如く活用する。

たい	
タク	
タク	タイ
タイ	タケレ

今日も雨降りぬ。

空しく今日も暮しつ。

時ノ助動詞

雨晴れたり。

ネロといふ殘忍なる王ありけり。

七珍萬寶さながら灰燼となりき。

終日讀書せり。

風吹かば波立たむ。

【六十七】右の**ぬ・つ・たり・けり・き・り・む**は動詞や助動詞に結びついて時の觀念をあらはすもので、これを**時の助動詞**といふ。

右の中**ぬ・つ・たり・けり・き・り**は過去、**む**は未來の時をあらはす。

注意　「盛衰定めなきはこの世なりけり」の「けり」は詠歎の意味で、過去ではない。

時の助動詞は次ぎのやうに活用する。

過			去			未來
ぬ	つ	たり	けり	き	り	む
ナ	テ	タラ	（ケラ）		（ラ）	
ニ	テ	タリ	（ケリ）		（リ）	
ヌ	ツ	タリ	ケリ	キ	リ	ム
ヌル	ツル	タル	ケル	シ	ル	ム
ヌレ	ツレ	タレ	ケレ	シカ	（レ）	メ

口語における時の助動詞として過去の意をあらはす場合に「た」、未來の意をあらはす場合に「う」「よう」が用ゐられる。「た」は左の如く活用し、「う」「よう」は活用しない。

過去複合ノ助動詞

た
テ
タ
タ
タラ

首かき切りて捨てけり。
月出でにけり。
高札をあまた立てたりき。
勤王の諸將兵を擧げたりけり。
いづれの御時にかありけむ。

過去ノ複合助動詞

【六十八】右のてけり・にけり・たりき・たりけりは過去の複合助動詞で、一層強く過去の意味を言ひあらはすもの、けむは過去の助動詞と未來の助動詞とを重ねて過去の推量を言ひあらはすものである。

口語ではこれらの助動詞は「た」「てしまつた」「たつた」「たらう」であらはされる。

注意　過去・現在・未來の時の外左の如く動作の完了をあらはすものがある。これを完了の時といふ。

行きたり　現在完了
行きたりき　過去完了
行きたらむ　未來完了

口語では完了の時が「行ッタ」「行ッテシマッタ」「行ッタラウ」となる。

花咲く。
鳥啼く。

現在ノ時

雨はげしく降る。
熱心に勉強せしむ。
友人にも見捨てらる。

〔六十九〕　右の**咲く・啼く・降る**の如き動詞、**しむ・らる**の如き助動詞は右の語形で**現在の時**をあらはす。

時ニ無關係ナ場合

犬もあるけば棒にあたる。
空氣の密度は高さに反比例する。
人は萬物の靈長なり。
出る杭はうたる。

〔七十〕　右の様な科學上の原則・定理或は格言等に用ゐられる動詞

及び助動詞は時に關係なく言ひあらはされ、之を**恒久時**といふ。歴史上の事實は現在で書きあらはすことが多い。之を**歴史的現在**といふ。

琵琶をよく彈かせ給ふ。
名刺を受けさせらる。
主上も行幸せしめ給ふ。
いみじき御歌をよまれたり。
御笛たびて吹かせらる。

敬語ノ助動詞

〔七十二〕 右の**す・さす・しむ・る・らる**は動詞や助動詞に結びついて敬意をあらはすもので、これを**敬語の助動詞**といふ。右の中**す・さす・しむ**は使役の助動詞、**る・らる**は可能の助動詞から轉じたものである。ゆゑにその活用は使役や可能の助動詞に準じて知ることが出來る。

口語における敬語の助動詞では使役の助動詞から轉じたものが消滅し可能の助動詞から轉じた「れる」「られる」は、先生が十日に横濱に着かれる。「舊藩主が年賀を受けられる」のごとく敬語として用ゐられる。又

その邊を少し散歩なさつては何うです。
これなら立派にお讀みなさいます。
ちよつと御待ちください。

の如く名詞や動詞になさる「くださる」等を結びつけ、或は、

横濱へ御着になります。

鎌倉へ御出になる筈だ。

の如く、動詞に「お」を冠らせ「になる」を結びつけて敬語に用ゐられる。

雨も降らず風も吹かず。

こはかなはじと逃げ失せたり。

たやすくは撃たるまじ。

〔七十二〕右のず・じ・まじは動詞や助動詞に結びついて、打消す意味をあらはすもので、これを**打消の助動詞**といふ。

打消の助動詞は次ぎのやうに活用する。但し「じ」は活用しない。

ず	ズ	ズ	ヌ	ネ
まじ	マジク	マジク	マジ	マジキ	マジケレ

比況ノ助動詞

右の「ず」と良行變格活用の動詞「あり」と結びついて「行カザラム」「行カザリキ」「行カザルベシ」「行カザレバ」といふやうに用ゐられることがある。

口語における打消の助動詞は「ん」「ない」「まい」の三種で「ん」「ない」は左の如く活用し「まい」は活用しない。

ん		ン	ン	ネ
ない	ナク	ナク	ナイ	ナイ	ナケレ

〔七十三〕右のごとしは用言に結びついて比喩の意をあらはすもの

漕ぎゆく舟の跡なきごとし。

歳月流るゝごとし。

で、これを比況の助動詞といふ。

比況の助動詞は次ぎのやうに活用する。

ごとし	ゴトク	ゴトク	ゴトシ	ゴトキ	

口語では比況の助動詞が消滅した。

練習

一　左の文例中から助動詞を摘出してその種類を説明せよ。

1 明治天皇が我が國をして今日見るが如き國家的地位をかち得させ給へる御功績と畏くも終始御身を以て國家とせられ、ひたすら精勵國事に盡し給ひ、御生涯を通じて變らせ給ふことおはせざる御德とは千世萬世に輝き渡りぬべし。

2 庭の楡の木の上に蟬が露を飲まうとしてゐます。するとその後に螳螂（カマキリ）が斧をかざして蟬を犯さうとしてゐます。螳螂は蟬をのみ見守りて後に黄雀（スズメ）がおのれを襲はうとしてゐるのを知りません。黄雀は螳螂をのみ見つめて木の下に弓をひいて子供がねらつて居るのを知りません。子供は前に深い谷があり、後に堀や、木の株のあるのを知らず、つひにその身を過ちました。

二　敬語の助動詞「す」「さす」「しむ」を用ゐて文例を作れ。

二　助動詞の活用形

助動詞ノ活用形

〔七十四〕　助動詞は用ゐ方によつていろ〳〵に活用するが、其の活用形には動詞や形容詞の活用形に似たものと、少し違つたものとある。

助動詞ノ活用形の種類

〔七十五〕　受身・可能及び使役の助動詞は下二段活用の動詞と同じやうに、又指定の助動詞「なり」「たり」、過去の助動詞「たり」「けり」は良行變格活用の動詞と同じやうに活用する。

過去の助動詞「ぬ」「つ」、未來の助動詞「む」、推量の助動詞「らむ」「めり」の活用形は、ほゞ動詞の活用形に似て居るが、推量の助動詞「まし」、過去の助動詞「き」、打消の助動詞「ず」の活用形は少し違ふ。

推量の助動詞「べし」、比況の助動詞「ごとし」、打消の助動詞「まじ」、願望の助動詞「たし」は形容詞と同じやうに活用する。

助動詞ノ活用圖

〔七十六〕　助動詞の活用形を圖に示せば左の通。

	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
受身	レ ラレ	レ ラレ	ル ラル	ル、 ラル、	ルレ ラルレ	レ ラレ
可能	レ ラレ	レ ラレ	ル ラル	ル、 ラル、	ルレ ラルレ	
使役	セ サセ シメ	セ サセ シメ	ス サス シム	スル サスル シムル	スレ サスレ シムレ	セ サセ シメ
指定	ナラ タラ	ナリ タリ	ナリ タリ	ナル タル	ナレ タレ	ナレ タレ
推量	ベク	ベク	ラム メリ マシ ベシ	ラム メル マシ ベキ	ラメ メレ マシカ ベケレ	

願望	過去	未來	打消	比況
タク	ナ（ラ）タ（ケラ）		ズ マジク	ゴトク
タク	ニ（リ）タ（ケリ）		ズ マジク	ゴトク
タシ	ヌ（リ）タ（ケリ）キ	ム	ズ マジ	ゴトシ
タキ	ヌル（ツル）タル（ケル）シ	ム	ヌ マジキ	ゴトキ
タケレ	ヌレ（ツレ）タレ（ケレ）シカ	メ	ネ マジケレ	

口語助動詞の活用形も文語における場合と同じく大體三種に分れる。すなはち一は動詞と同じ様に活用するもの、その二は形容詞と同じ様に活用するもの、その三は動詞や形容詞と少し異る活用をなすものと三種ある。これらの活用形を圖に示せば左の通。

	受身	可能	使役
將然形	レ ラレ	レ ラレ	セ サセ
連用形	レ ラレ	レ ラレ	セ サセ
終止形	レル ラレル	レル ラレル	セル サセル
連體形	レル ラレル	レル ラレル	セル サセレ
已然形	レ ラレ	レ ラレ	セレ サセレ
命令形	レ ラレ		セ サセ

敬語					
レ	レ	レル	レル	レヽ	レ
ラレ	ラレ	ラレル	ラレル	ラレヽ	ラレ
ナサラ	ナサリ	ナサル	ナサル	ナサレ	ナサイ
下サラ	下サリ	下サル	下サル	下サレ	下サイ

願望	タク	タク	タイ	タイ	タケレ
推量	ラシク	ラシク	ラシイ	ラシイ	
打消	ナク	ナク	ナイ	ナイ	ナケレ

過去	テ	タ	タ	タラ	
打消		ン	ン	ネ	
指定	デ	ダ			

將然形	連用形	終止形	連體形	已然形

練習

一　受身・可能及び使役の助動詞について、その活用形を説明せよ。

二　口語における指定・推量・打消の助動詞について、その活用形を説明せよ。

第九章　助詞

月山に上る。

花を見る。

君と同行せむ。

論より證據。

行くとも甲斐なからむ。

きたなき味方の振舞かな。

助詞

〔七十七〕 右のに・を・と・より・とも・の・かなは語句を接續し、或はその關係を表示し、又は他の語に結びついて種々の意味を言ひあらはして居るもので、いづれも助詞である。

助詞ノ種類

〔七十八〕 助詞にはは・の・に・を・と・へ・より・まで・にてなどの如く體言に結びついて語句の關係をあらはすものと、が・の・て・ば・とも・どもなどの如く、用言に結びついて語句を接續するものと、も・ぞ・や・か・な・ばかり・のみ・だに・さへ・すら・こそなどの如く、體言や用言に結びついて疑問・感歎・禁止・願望その他種々の意味をあらはし、或はいろ〳〵の役目をするものとある。

口語における助詞はその種類も用例もよほど變つて居る。

練習

左の文例により語句を接續する助詞を說明せよ。

1 己は八裂にせらるとも、主君の過失を言はず。

2 珍しからぬ事なれども、よき喩にもありつるかな。

3 世に天禀の才と云ふことなきにあらねど、琢かずば玉も瓦礫に等しかるべし。

4 兄弟は多いが、皆女ばかりだ。

5 勉强すれば及第が出來るだらう。

第十章　品詞の種類

品詞

【七十九】名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞・感動詞・助動詞及び助詞を品詞といふ。

【八十】品詞には動詞・形容詞及び助動詞のやうに活用するものと、名詞・代名詞・副詞・接續詞・感動詞及び助詞のやうに活用しないものとある。

【八十一】名詞・代名詞・動詞・形容詞・副詞・接續詞及び感動詞はそれぞれ固有の意味を有して居るが、助動詞と助詞とは他の語に結びついてはじめて種々の意味をあらはし、いろ〳〵な役目をなすもので、それ自身には固有の意味がない。

練習

一　左の文例によりそれ〴〵の品詞について説明せよ。

あるほどの寺々の名花ところ〴〵の花園いづれも道の左右に埒を廻し五彩の色華かに緞子の幕を打ち、殿下には若君以下上蔦衆を從へ、歩行にてゆるやかに歩を運ばせられる。花は今を眞盛り、梢も枝もたわゝに咲き揃うて風あらば散らうとする。五重の塔の朱は常磐の松杉に映りて谷川の水は瀬に玉を轉ばす。幽かな韻は風なきに起り、山路悠々として寂しい趣が身に逼る。

二　左の文章に誤あらば正し、その理由を説明せよ。

1をさ〳〵獸にも劣るべし。

2木を植ゆるには季節が大切なり。

3 よく考えて返事せよ。
4 夏涼しくばながく滞在したり。
5 須く奮勵努力せよ。
6 當字は一切用ゆるべからず。
7 人を教ゆるは難し。

第三編　語と語の連續

第一章　動詞・形容詞と助動詞・助詞との連續

動詞將然形ノ連續

うれしさ筆紙に盡されず。
われ劣らじと進みゆく。
人の心は長閑からまし。
妻には病まれ子には泣かる。
朝六時に起きさす。
差支あらば中止せむ。
雨天にて中止せり。

【八十二】右の如く動詞の將然形から打消の助動詞「ず」「じ」、推量の助動

詞「まし」にも、受身・可能・使役及び未來の助動詞にも結びつく。佐行變格活用の動詞の將然形から過去の助動詞「り」に結びつく。又助詞の「ば」にも結びつく。

口語では動詞の將然形に受身・可能・使役の助動詞と打消の助動詞が結びつく。四段活用には未來の助動詞「う」、その他の活用には「よう」が結びつく。

終日雨降りぬ。

日もすでに暮れたり。

昔在原行平といふ人ありき。

雲を霞と失せにけり。

早く全快したしと願ふ。

動詞連用形ノ連續

【八十三】右の如く動詞の連用形から過去及び願望の助動詞に結びつく。又助詞「て」「つゝ」にも結びつく。

口語における動詞の連用形から助動詞や助詞に結びつく模樣は文語における場合と同樣である。

日暮れて道遠し。

富士の高嶺に雪はふりつゝ。

連用形ト音便

【八十四】四段活用の助詞の連用形が助詞「て」に結びつく場合に、音便によつて次ぎのやうに語形の變化することがある。即ち、

泣きて　泣イテ　洗ひて　洗ウテ

裂きて　裂イテ　及びて　及ンデ

斷ちて　斷ツテ　飛びて　飛ンデ
問ひて　問ウテ　食ひて　食ツテ
去りて　去ツテ　從ひて　從ツテ

注意　右の場合に「思フテ」「舞フテ」「襲フテ」「及ムデ」「飲ムデ」といふやうに書き誤ることがある。

「書ヲ讀ミ、字ヲ書ク。」といふのを、對話の場合には、「書ヲ讀ンダリ、字ヲ書イタリスル。」「書ヲ讀ンデ、字ヲ書ク。」「書モ讀メバ字モ書ク。」「書モ讀ムシ字モ書ク。」といふやうに言ひあらはす。

をさ〳〵人に劣るまじ。
金は山に捨て玉は淵に投ぐべし。

動詞終止形ノ連續

いかに見給ふらむ。
かくやあらむと人毎にいふめり。
山の紅葉今や散るらし。
名高き一寺ありときく。
試驗を受くとも及第覺束なからむ。
かゝる淺ましきことも候ふや。

【八十五】右の如く動詞の終止形（良行變格活用は連體形から）から打消の助動詞「まじ」、推量の助動詞「べし」「らむ」「めり」「らし」に結びつく。又助詞「と」「とも」「や」にも結びつく。

口語では動詞の終止形から推量の助動詞「だらう」「らしい」及び助詞「と」に結びつく。

子を持ちて親の恩は知るなり。

木の葉の亂るゝごとし。

受驗者いくばくあるか。

風そよ〳〵と吹き來るが心地よきものなり。

人の助力を受くるを喜ばず。

動詞連體形ノ連續

【八十六】右の如く動詞の連體形から指定の助動詞「なり」、比況の助動詞「ごとし」に結びつく。又助詞「か」「が」「を」等にも結びつく。

口語では助詞「か」「が」「を」「のか」「のが」「のを」として用ゐることが多い。

風吹けば花散る。　人觸るれば人を斬る。

動詞已然形ノ連續

雨降れども寒からず。勉強すれども甲斐なし。

古人はかくいへり。

【八十七】右の如く動詞の已然形から助詞「ば」「ども」等に結びつく。又四段活用の動詞に限り、その已然形に過去の助動詞「り」が結びつく。

口語では動詞の已然形から助詞「ば」にのみ結びつく。

形容詞將然形ノ連續

重くば車をやとはむ。

寂しくば人を遣はさむ。

【八十八】右の如く形容詞の將然形から助詞「ば」に結びつく。

口語では「重ければ」「寂しければ」と言ひ、將然形から助詞「ば」に結びつくこ

とがない。

心にもなくて打過ぎぬ。

貧しくとも樂しく暮さむ。

形容詞連用形ノ連續

【八十九】右の如く形容詞の連用形から助詞「て」「とも」に結びつく。

口語における用例は右と同じである。

わが思ふ人ありやなしや。

怪しと見る間に消え失せぬ。

形容詞終止形ノ連續

【九十】右の如く形容詞の終止形から助詞「や」「と」に結びつく。

口語では助詞「や」の用例は消滅した。

この色が珍しきなり。

漕ぎゆく舟のあとなきごとし。

甲乙のいづれが輕きか。

なきが多くもなりにけるかな。

事の遲きを憂へず。

あゝ悲しきかな。

形容詞連體形ノ連續

【九十一】右の如く形容詞の連體形から指定の助動詞「なり」、比況の助動詞「ごとし」に結びつく。又助詞「か」「が」「を」「かな」等にも結びつく。

口語では助詞「か」「を」「のか」「のを」として用ゐることが多い。

どちらが輕いのか。

悲しいのを我慢した

價高ければ買はず。

夏は涼しけれども冬は寒し。

形容詞已然形ノ連續

〔九十二〕右の如く形容詞の已然形から助詞「ば」「ども」等に結びつく。

口語では形容詞の已然形から助詞「ば」にのみ結びつく。

練習

左の文例により動詞・形容詞と助動詞・助詞との連續を説明せよ。

1 風のまに〳〵散るが面白きなり。

2 命長ければ恥多しといへり。

3 いと口惜しけれど思ふに任せず。

4 病に襲はれ貧に苦しめらる。

5 民をして飢寒に叫ばしむ。

6 をさ〳〵人に劣るまじ。

7 よくとも惡しくともわが知るところにあらず。

8 見れども見えず聞けども聞えず。

第二章　助動詞と用言との連續

八丈島に流さる。

英文は讀まる。

子に死なる。

教室に立たしめらる。

馬に蹶らるゝ恐あり。

横濱に着かるゝ筈。

受身・可能・敬語ノ助動詞

【九十三】右の如く受身・可能及び敬語の助動詞るは四段活用及び奈行變格活用（良行變格活用の動詞に結びつくことは殆どない）の將然形に、らるは其の他の動詞及び使役の助動詞の將然形に結びつく。

注意　佐行變格活用の動詞に結びつく場合に、「罪サル」「評サル」「解釋サル」などと用ゐることは、現代文において許容される。

口語における佐行變格活用の動詞に結びつく場合には、「シラレル」と、セラレルの二種の形式が成立つが、然しその約めた形式の「サレル」を用ゐることが多い。又漢語及び國語の名詞を動詞に用ゐる場合には左の如くいろ〳〵に用ゐられる。

ひどく罰しられた。

もし拒絶せられると困る。

牢獄に投ぜられた。

わるい噂されて弱つた。

子供に本を讀ます。

召仕を往なす。

御側に侍らせ給ふ。

よく將來を考へさす。

瀧にうたれさす。

人目を樂ましむ。

使役・敬語ノ助動詞

【九十四】右の如く使役及び敬語の助動詞すは四段活用、奈行變格活用及び良行變格活用の動詞の將然形に、さすは其の他の動詞及び受身の助動詞の將然形に結びつく。又しむはすべての動詞の將然形に結びつく。

注意　「得」といふ動詞を「得セシム」と用ゐることは現代文において許容される。又佐行變格活用の動詞に結びつく場合に「せ」を省いて「手習サス」「周旋サス」「賣買サス」等と用ゐることもやはり許容される。口語では使役の助動詞を佐行變格活用の動詞に結びつけるときは「達シサセル」「判ジサセル」といふやうに用ゐる。

楠正成は忠臣なり。

指定ノ助動詞

【九十五】右の如く指定の助動詞なりは名詞・代名詞及び動詞・助動詞の連體形に、たりは名詞や漢語に結びつく。

口語における指定の助動詞「だ」「である」が動詞・形容詞又は助動詞に結びつく場合には、左の如く其の間に助詞「の」を挿入するのが例である。

犬が魚をくはへて居るのだ。

僕が確に見たのである。

責任者は汝なり。

思の外のこともあるなり。

臣臣たり君君たり。

いかに聞しめし給ふらむ。

庭の秋萩散りぬめり。

かゝる山里にも人住みけるらし。

われも行かまし。

今明日中に斬らるべし。

推量ノ助動詞

【九十六】右の如く推量の助動詞**らむ・めり・らし・べし**は動詞及び助動詞の終止形（良行變格活用の動詞及び助動詞「たり」「なり」は連體形）に結びつく。又**まし**は動詞の將然形に結びつく。

口語における推量の助動詞「だらう」は動詞の終止形と名詞や漢語に結びつく。同じく「らしい」は動詞や形容詞の終止形に結びつく。

早く行きて見たし。

願望ノ助動詞

【九十七】右の如く願望の助動詞**たし**は動詞及び助動詞の連用形に結びつく。

口語における願望の助動詞「たい」も右と同じである。

人にはほめられたきものなり。

風も吹きぬ。

火も消えつ。

十日も過ぎたり。

世の定なりけり。

人にも語りき。

今日も雨降りにき。

遠く失せにけり。

かくは記したりき。

時ノ助動詞
過去の意味をあらはす

【九十八】　右の如く時の助動詞中過去の意味をあらはす**ぬ・つ・たり・けり・き**は動詞及び助動詞の連用形に結びつく。これを二つ重ねた複合助動詞「にき」「にけり」「たりき」などの結びつき方もやはり同樣である。

又過去の意味をあらはすりは、

彼は渡米せり。

人々かく噂せり。

のごとく佐行變格活用の動詞の將然形に、

假名にてうるはしく書けり。

時ノ助動詞
未來の意味をあらはす

三たび勝てり。

人はかく言へり。

のごとく四段活用の動詞の已然形に結びつく。

注意　良行變格活用の動詞「居り」「異り」を「居れり」「異れり」と用ゐることは現代文において許容される。又佐行四段活用の動詞を「シ・シカ」に連ねて「暮シ、時。」「過シ、カバ。」などいふべき場合を「暮セシ時。」「過セシカバ。」と用ゐることは、現代文において許容される。

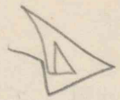
とく行かむ。

いつかは聞かしめむ。

【九十九】　右の如く未來の意味をあらはす**む**は動詞及び助動詞の將

然形に結びつく。

口語における時の助動詞で過去の意味をあらはす「た」は動詞の連用形に、未來の意味をあらはす「う」は四段活用の動詞及び助動詞「ます」の將然形に、「よう」は其の他の動詞及び助動詞の將然形に結びつく。



案内を受けず。
終日外出せしめず。
そはかなふまじ。
たやすくは打たるまじ。
聞かじといふ。
打たれじと逃げまはる。

打消ノ助動詞

【一百】右の如く打消の助動詞ず・じは動詞及び助動詞の將然形に、まじは動詞及び助動詞の終止形（良行變格活用の動詞は連體形）に結びつく。

口語における打消の助動詞「ん」「ない」は動詞及び助動詞の將然形に結びつく。佐行變格活用の動詞に結びつく場合には「しない」と「せん」の二種が用ゐられる。

木の葉の風に亂るゝごとし。
漕ぎゆく舟の跡なきごとし。

比況ノ助動詞

【一百一】右の如く比況の助動詞ごとしは動詞及び形容詞の連體形に結びつく。又現代文では「春ノ海ノゴトシ。」「山ノゴトシ。」「空シキガゴトシ。」「目ニ見ルガゴトシ。」といふやうに助詞「の」「が」の下に用ゐ

られることが多い。

比況の助動詞は口語において消滅し「ごとし」の代りに普通「やう」が用ゐられる。

練習

一　左の文例により助動詞と用言の連續を説明せよ。

1 名利に囚はるゝ勿れ。
2 笠置の城落ちて、主上囚はれさせ給ひぬ。
3 物語せさせて夜を更しぬ。
4 會社のため日夜奔走せしめられたり。
5 午前十時までに出頭せしむべし。
6 櫻の花を見てかくは詠ませ給へるなりき。
7 友人にも捨てられた。
8 たゞ一度で懲りさせたらしい。

二　動詞の將然形・連用形及び終止形に結びつく助動詞を擧げよ。

三　左の文章に誤あらば正し、その理由を述べよ。

1 人に書かさせて見てゐた。
2 臣に命じて射さしむ。
3 君を訪はんと欲すなり。
4 樹木を植ゑべからず。
5 苦心の功速にあらはれり。
6 重要なる件は人に任せまじきものなり。
7 かく重く罪さずとも可からん。

第三章　助詞の用法の一

助詞ノ用法ノ一

【百　三】助詞には體言に結びついて專ら語句の關係をあらはすものがある。次ぎにその各〻について用法を説明する。

がノ一

【百　三】が

君が代　梅が枝　佐渡が島　淺間が嶽

右のがは語と語を結びつけたもの、

こゝが大切なる所なり。

書見が最も適當なる消夏策なり。

がノ二

右のがは主語に結びついたものである。

は

口語では右の外「を」の意味で用ゐられる左の如き例がある。

氷水が飲みたい。

芝居が見たい。

馬に鹽俵がつけてありました。

【百　四】は

人は萬物の靈長なり。

よな〳〵蟲は聲弱るなり。

柳は綠に花は紅なり。

古のはは主語に結びついたものである。

口語においては「が」が專ら主語に結びつけられ「は」を用ゐる場合には特

にその意味の強くなることが多い。

のノ一

【百五】の

櫻の花　人の心　山の上　冬枯の森

右ののは語と語を結びつけたもの、

秋風の吹く。

ある人のいふ。

右ののは主語に結びついたものである。

のノ二

つ

注意　「沖つ白波」「天つ風」「時つ風」のつは「の」と同じ意味で、語と語を結びつけたものである。

口語では主語に結びつく「の」が消滅した。又「のは」「のが」「のも」「のに」「ので」

に

【百六】に

都に住む。　机に本を載す。　財産を子に與ふ。　花に吟じ、月に嘯く。　その罪人にあり。

右のには動作又は存在の標準や場所を示すものである。

にノ一

五日に風吹き十日に雨降る。

朝五時に出發せり。

右のには種々の語句に結びついて副詞の意味をあらはす語句を形作るものである。

にノ二

注意　「月に叢雲、花に風。」「猫にまたゝび泣く子にお乳。」は語句を特殊の

といふやうに他の助詞に結びついていろ〳〵に用ゐられる。

意味で結びつける一種の慣用である。

口語においても「に」の用例はほゞ同じであるが左の如く語句を重ねるときに用ゐられることがある。

ビールにタバコにマッチ。

櫻に梅に桃にいろ〳〵あります。

〔百七〕を

書を讀む。

猫鼠を捕ふ。

家門を過ぎて入らず。

國を去る。

を

右のをは動作の目的又は標準を示すものである。

〔百八〕と

人これを天の川と呼ぶ。

嗣子の名を太郎といふ。

桑田變じて海となる。

右のとは專ら動作の標準を示すものである。

とノ一

昨夜妹と散歩したり。

英吉利と同盟を結ぶ。

とノ二

右のとは「ト共ニ」の意味を有する。

「花も既に散りはてぬ」と聞く。

「ありやなしや」と問ふ。

右のとは一の語句を受けたのである。又

月と花とによし。

酒と煙草とマツチとを賣る。

の如く語句を重ねる時に用ゐられることもあるが、この場合誤解を引起さない限り、最後の「と」を省いても差支ない。

注意　左の如き場合は最後の「と」を省くと誤解を生ずる恐がある。

史記と漢書との列傳を讀む。

史記と漢書の列傳とを讀む。

〔百九〕へ

すでに任地へ赴く。

春の初都へのぼる。

東京へ行きて華族の邸に奉公せり。

右のへは大體方向を示す時に用ゐられるので、場所をあらはす「に」と區別せられてゐる。然し近來この區別が曖昧になつた。

口語では場所や方向をあらはすのに「へ」も「に」も同じやうに用ゐられる。

〔百十〕より

友人より寫眞を送り來る。

特使露國より到着せり。

右のよりは動作の標準や起點を示し、又

よりノ二

父母の恩は山よりも高く、海よりも深し。

花よりむしろ月によし。

のよりは比較の意味に用ゐられる。

口語では動作の標準や起點を示す場合に、いつも「からが用ゐられる。

學校は午前七時から始まる。

滿六歳から入學を許す規定である。

東京から送つて來た。

私から申上げませう。

〔百十一〕　まで

横須賀まで行く筈。

まで

後の世までその名傳はる。

封書は四匁まで三錢なり。

右のまでは範圍や程度を示すものであるが、左の如く「より」と「まで」と相對して用ゐられることもある。

十八歳より二十歳まで採用すべし。

巴里より伯林まで直通列車あり。

口語では右の場合に「からと「まで」と相對して用ゐられる。

〔百十二〕　にて

干潟にて貝を拾ふ。

舟にて川を下る。

鉛筆にて字を書く。

講義は一週間にて終らむ。

頭は人にて身體は魚なり。

右のにては「ニオイテ」「ニヨリテ」ヲモツテ」「ニシテ」等種々の意味に用ゐられる。

口語ではこの「にて」の場合にいつも「で」が用ゐられる。

この本は神田で買つた。

小刀で鉛筆を削る。

頭は人で身體は魚である。

練習

左の文例により體言に結びつく助詞を説明せよ。

1 公の精忠日月と光を爭ふ。

2 汝が只今の振舞あらはれなば我よりも罪重からむ。

3 子に聖賢の道を教ふ。

4 かの人の申開にて今日まで命ながらへ候。

5 花より外に知る人もなし。

6 それより奥州の方へ志す。

7 將軍駒を樹下にとゞめて願望すれば、胄も花、鎧も花、身はいつしか畫中の人となる。

第四章　助詞の用法の二

〔百十三〕 助詞には用言に結びついて專ら語句を接續するものがあ

る。次ぎにその各〻について用法を説明する。

て

【百十四】 **て**

日暮れて道遠し。

雨降りて地固まる。

水深くて流れ遲し。

雨に降られて難儀せり。

右の**て**は動詞・形容詞及び助動詞の連用形に結びついて、語句を接續するものであるが、この場合左の如く「て」を省くことがある。

雨降り、(テ)風吹く。

淺草へ行き、(テ)活動寫眞を見る。

で　ば

又「て」と打消の助動詞「ず」と結びついた「ずて」の更に變化した「で」は次のやうに用ゐられる。

あらしも吹かで、秋も過ぎぬ。

ものをも言はで、打伏したり。

【百十五】 **ば**

差支あらば中止せむ。

用意よくば知らせよ。

彼に讀ましむれば可なり。

水清ければ、魚棲まず。

右の**ば**は條件を示すもので、この中動詞・形容詞及び助動詞の將然

形に結びつくものは假定、その已然形に結びつくものは既定の意味をあらはす。

口語では已然形で假定の意味も既定の意味もあらはしてゐる。

差支があれば中止しよう。

雨が降れば行かない。

【百十六】　と　とも　ど　ども

繪に書くと、筆も及ばじ。

たとひ榮位に上るとも、心に驕ることなかれ。

心にかゝれど、未だ果さず。

水の流早けれども、渉るに難からず。

と、とも

ど、ども

右の**と**・**とも**は假定の條件、**ど**・**ども**は既定の條件を示す。

と・**とも**は動詞・助動詞の終止形、形容詞の連用形に、**ど**・**ども**は動詞・形容詞及び助動詞の已然形に結びつく。

注意　「とも」は「數百年ヲ經ルトモ。」「如何ニ批評セラルヽトモ。」「强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ。」の如く、連體形に結びつくことは、現代文において許容される。

又「之ヲ省略スヽトモ妨ナシ。」「之ヲ省略スレドモ妨ナシ。」と區別して用ゐるべき形式を「之を省略スルモ妨ナシ。」と用ゐることは、誤解を生じない限り許容される。

口語では「とも」「ども」の場合に、「行つても駄目だ」「飲んでも醉はない」の如く「ても」「でも」が一般に慣用される。

が

〔百十七〕　が

風は吹くが、さして寒からず。

心は麗しきが顔は醜し。

昔はかゝることもありけるが、今は稀なり。

右のがは動詞、形容詞及び助動詞の連體形に結びつき、專ら語句を接續するものである。

〔百十八〕　に

日暮れかゝるに、宿るべきところもなし。

夜はまだ暗きに、はやくも旅立ちぬ。

に

借覽を乞ひしに、快く承諾せり。

右のには動詞・形容詞及び助動詞の連體形に結びつき、專ら語句を接續するものである。

口語では「の」と結びついて條件をあらはす場合に用ゐられる。

いつも長いのに閉口する。

日が暮れるのにまだ來ない。

この暑いのに、外套を着てゐる。

〔百十九〕　を

雨のながく降りつゞくを人々ものうしと思ひき。

心にかゝることのなきを只誇としたり。

を

北の障子にはかけ金もなかりけるを、それも尋ねず。

右のをは動詞・形容詞・及び助動詞の連體形に結びつき、專ら語句を接續するものである。

練習

左の文例により專ら語句を接續する助詞を説明せよ。

1 一人の茶道坊主甞てその士の恩を受けたることありしが、今この有様を痛み、夜潛に燒飯を携へ行きて與へたり。

2 春になりたれど風なほ寒し。

3 いかなる罪科に行はるともつゆ恨み奉らじ。

4 始めて反射爐三個を建設したるが、その遺跡現に存す。

5 家に入りて見るに人影だになし。

助詞ノ用法ノ三

6 夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいづこに月やどるらむ。

7 尤大なる美田と數億の民衆とを以てするも尚列國の輕侮を免れず。

第五章　助詞の用法の三

【百二十】 助詞には或る語句に結びついて、疑問・感歎・禁止・願望其の他種々の意味をあらはし、或はいろ〳〵の役目をするものがある。次ぎにその各〻について用法を説明する。

【百二十一】 も

かくて今日も暮れぬ。

雪の降るもいとはず。

もノ一

我も同行せむ。

右のもは物事を網羅し、或は附加する意味を有する。又

梅も櫻もあり。

知るも知らぬも逢坂の關。

もノ二

神も佛もなき世なり。

の如く、物事を並列する場合にも用ゐられる。

口語では以上の外、

今年は十五人も入學した。

酒なら一升も飲む。

のやうに分量を示すことがあるし。

さすがの丈夫自慢も少し弱つたやうだ。

飛ぶ鳥も落す勢です。

のやうに程度を示すこともある。

〔百二十二〕　ぞ

かゝる例もありけりとぞ。

思ふに任せぬは世の常ぞ。

ぞノ一

右のぞは文の終に用ゐられ、感歎の意をあらはす。又

ほと〳〵と叩くは誰ぞ。

汝は何を歎くぞ。

ぞノ二

のやうに上に疑の語を受けて問ひかける場合に用ゐられることもある。

こそ

【百二十三】　**こそ**

物のあはれは秋こそまされ。

好こそ物の上手なれ。

今年こそ必ず受驗致すべく候。

右の**こそ**は特に或るものを拔き出し、或は語句の意味を強めて言ひあらはす場合に用ゐられる。

【百二十四】　**だに　さへ　すら**

家のあたりだに今は通らじ。

鏡を恐れて手にだに取らず。

だに
さへ
すら

鶯の音さへ變らず。

涙をさへ落して喜びぬ。

聖人すら猶かくのごとし。

行方すら定かならず。

右の**だに**には輕いものを擧げて其の重いものを言外に覺らしめる意味があり、**さへ**には或る事柄の上に更に重い意味を添へる心持があり、**すら**には一事を擧げて他を推定させる意味がある。但しこの嚴重な區別は現代文に存在しない。

口語では右の場合に「さへ」を用ゐ、「だに」「すら」は消滅した。

手腕さへあれば何でも出來る。

あなたさへ御承知なら結構です。

痛みさへ取れゝば有りがたい。

〔百二十五〕　と

試驗を受くといへども及第覺束なし。

敵軍攻め來と聞ゆ。

狹しといへども夜臥す床あり。

雲を霞と逃げ失せけりとぞ。

右のとは動詞・形容詞及び助動詞の終止形を受けて其の下に續けるときに用ゐられる。

注意　現代文では「嘲弄セラルヽト思ヒテ。」「終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ。」「萬人皆ソノ德ヲ稱ヘケルトゾ。」の如く、其の連體形を受ける習慣あるものは許容せられる。

口語においては、右の外、

泣くと叱られる。

雨が降ると行かれない。

あの人に讀ませると、大層面白い。

のやうに條件を示す場合に用ゐられることもある。

〔百二十六〕　のみ　ばかり

たゞ思ひ出でらるゝは故國のみ。

結論のみ簡單に述べむ。

心に思ふばかりなり。

のみ
ばかり

家藏ばかりは人手に渡さじ。

右のの**みばかり**はほゞ同じ意味で、或るものを特に限りて言ひあらはす場合に用ゐられる。又「ばかり」は次ぎのやうに分量や程度を示す場合にも用ゐられることがある。

身の丈一丈ばかりの鬼。

三年ばかり過ぎ去りぬ。

心を喪ふばかり歎き悲しめり。

口語においては「のみ」の代りに普通「だけ」「ばかり」が用ゐられる。

【百二十七】　つゝ

人の住居は日を經つゝあれゆく。

つゝ

叱られつゝ未だ改めず。

肩を打たしめつゝ眠れり。

右の**つゝ**は動詞及び受身・使役の助動詞の連用形に結びつき、動作の進行・繼續をあらはす。

口語においては「知リツヽ知ラン顔ヲシテ居ル。」「心ニ思ヒツヽ御無沙汰致シマシタ。」といふやうに「ナガラ」の意味で用ゐられる。

【百二十八】　や

こゝに魚棲めりと思ふや。

我が思ふ人ありやなしや。

英語は必修科目なりや。

右のやは動詞・形容詞及び助動詞の終止形に結びつき、專ら疑問の意をあらはす。

注意　現代文においては「有ルヤ。」「面白キヤ。」「父ニ似タルヤ母に似タルヤ。」の如く連體形に結びつくことも許容される。

やノ一

その時悔ゆとも甲斐あらむや。

やノ二

空しく日をや過すべき。

かくてやは果つべき。

右のや・やはは反語の意をあらはし、

あな面白の春の夜や

めづらしや義經。

やノ三

人の病を獲るや、藥を選み、食を愼しむ

のやは感歎の意をあらはす。又

花や紅葉を賞す。

やノ四

ありやなしやは措いて問はず。

のやうに語句を重ねる場合にも用ゐられる。

口語では疑問や反語の「や」は用ゐられない。又「やら」は

踊るやら歌ふやら大騒であつた。

嬉しいやら悲しいやらさつぱり分らん。

の如く語句を重ねる場合に用ゐられ、或は、

何うやら晴れさうだ。

何をするやら少しも油斷が出來ない。

のやうに、推量又は不定の意味をあらはすのにも用ゐられる。

【百二十九】　か

そこに來るは誰か。

今年も試驗を受くるか。

心にかゝることなきか。

君はそこに幾年住みしか。

右のかは體言又は動詞・形容詞及び助動詞の連體形に結びつき、專ら疑問の意をあらはす。

注意　上に疑の語「たれ」「いくばく」「いづれ」等がある場合には、其の下を「か」で受けるのが例であるが、現代文では「誰ニヤ問ハン。」「幾何ナルヤ。」

かノ一

「如何ナル故ニヤ。」の如く、之を「や」で受けることは許容される。

かノ二

あすありと頼むべき身か。

いかでか遠く遊ばるべき。

何かは苦しからむ。

右のかかは反語の意をあらはす。又

かノ三

世の中は夢か現か。

あるかなきかの御有樣なり。

のやうに語句を重ねるのにも用ゐられる。

【百三十】　な　な…そ

な

な…そ

行くな歸るな佇むな。
必ず忘れらるな

右のなは動詞や助動詞の終止形に結びついて禁止の意をあらはす。又

手な觸れそ。
聲高になのたまひそ。

のやうにな　そと相呼應して禁止の意をあらはすことがある。

この場合に「そ」は動詞の連用形（加行變格活用・左行變格活用の動詞は將然形）に結びつく。

【百三十一】　ばや　なむ

老いず死なずの藥を得ばや。

ばや
なむ

上手に書かばや。
苔の衣をわれに貸さなむ。
師の恩を報いなむ。

右のばや・なむは願望の意をあらはす。

注意　願望の意をあらはす「なむ」は動詞の將然形に結びつく。連用形に結びつく「なむ」は過去の助動詞「ぬ」の將然形に未來の助動詞「む」の結びついたものであるから、「行かなむ」と「行きなむ」とはその意味が違ふ。

【百三十二】　よ　かな　を

壽永の秋の頃かとよ。
愛すべき可憐の弟よ。

よ
かな
を

恐ろしき御心かな。

こは思もよらぬ仰かな。

昨日今日とは思はざりしを。

右の**よ・かな・を**はいづれも感動の意をあらはす。

練習

左の文例により助詞の種々の意味や役目を説明せよ。

1 雨がもう晴れるぞ。

2 散りぬとも香をだに殘せ梅の花。

3 聖人賢人と仰がれ給ふ人すら獄内に入り給ふ。

4 この夜雨降り蚊さへ多くして人々いも寢ず。

5 直衣の袖を絞りつゝ泣く〳〵諫め申されけり。

6 かほどの理誰かは思ひよらざらむ。

7 君の御爲に後めたき心やはある。

8 こよひはこゝに宿りなむ。

9 かしこくも問へるものかな。

10 一人も殘らず討取つて年來の仇に報い、此度の恩賞に預らばや。

11 着彈距離に達するや、敵艦これに向ひて砲擊を始めたり。

12 いかな事鼠一疋あらばこそ。

第四編　文

第一章　文の成分

一　語　句　文

山。川。流る。美し。涼しき夏の夜。屋根の上に。前より後へ。花咲く。雪白し。

【百三十三】右の山・川・流る・美し・の・に・より・へはいづれも獨立の品詞として用ゐられるもので、これを語といふ。

涼しき夏の夜・屋根の上に・前より後へは二個以上の語の結びついて或る意味をあらはすもので、これを句といふ。

花咲く・雪白しは主語と述語が結びついて或るまとまつた思想をあらはすもので、これを文といふ。

練習

左の文例により語・句・文を說明せよ。

1 花より團子。
2 冑も花、鎧も花。
3 見渡せば白雪皚々たる比良の雪。
4 涙雪の上に落つ。
5 玉松操は偉丈夫なりき。
6 桃の花あり、櫻の花あり。
7 飛行船が飛んでゐる。

二　主語　形容詞　形容詞句　形容詞節

主語

月出づ。
雪晴る。
花が紅い。
僕が行く。

【百三十四】右の文例中**月**・**雪**・**花**・**僕**はいづれも主語で、かやうに主語が單純な名詞又は代名詞から成立つことがある。

暖かき風吹く。
樂しき日來る。
白い花が咲く。
なつかしい君も來てくれて有りがたい。

形容詞ヲ有スル主語

靜なる日は稀なり。
逆捲く波打寄す。

【百三十五】右の文例中**暖かき風**・**樂しき日**・**白い花**・**なつかしい君**・**靜なる日**・**逆捲く波**はいづれも主語で、かやうに主語が名詞や代名詞を限定する**暖かき**・**樂しき**・**白い**・**なつかしい**といふ形容詞、**靜なる**といふ形容動詞、**逆捲く**といふ形容詞と同格の語の結びついたものから成立つことがある。

最も親しき友人尋ね來れり。
頗る壯麗なる家屋櫛比す。
至つて貧しい僕もその仲間だ。

鴨川の水われを迎ふ。

形容詞句ヲ有スル主語

【百三十六】右の文例中最も親しき友人・頗る壯麗なる家屋・至つて貧しい僕・鴨川の水はいづれも主語で、かやうに主語が名詞や代名詞を限定する最も親しき・頗る壯麗なる・至つて貧しい・鴨川のといふやうな句の結びついたものから成立つことがある。かやうな句を形容詞句といふ。

翠濃き丘陵前面にあり。

顏の色白き彼は百難をかくす。

日光のさゝない藪がある。

水の流れる音が遠く聞える。

形容詞節ヲ有スル主語

【百三十七】右の文例中翠濃き丘陵・顏の色白き彼・日光のさゝない藪・水の流れる音はいづれも主語で、かやうに主語が名詞や代名詞を限定する翠濃き・顏の色白き・日光のさゝない・水の流れるといふやうな文の結びついたものから成立つことがある。かやうな文を形容詞節といふ。

形容詞的修飾語

注意　名詞や代名詞を限定する形容詞・形容動詞・形容詞と同格の語・形容詞句及び形容詞節を總稱して形容詞的修飾語といふ。

練習

一　左の文例により主語に附屬した形容詞・形容詞句・形容詞節等を摘出せよ。

1 悲しき一夜はかくてあけぬ。

2 洋々たる恒河ゆるく流る。
3 待構へた乘手が勢揃をした。
4 櫓をあやつりて横ぎる舟あり。
5 家に莫大なる資産あり。
6 春秋の夕の眺はいふも更なり。
7 鷗の群れ飛ぶ光景一幅の畫に似たり。
8 山吹の花のほろ〳〵と散る頃が一層よい。

二　國語讀本から主語に附屬した形容詞句及び形容詞節を集めよ。

三　述語　副詞　副詞句　副詞節

鳥飛ぶ。

天暗し。
尊氏は逆臣なり。
私が取らせる。
この夏は暑い。

〔三十八〕右の文例中飛ぶ・暗し・逆臣なり・取らせる・暑いはいづれも述語で、かやうに述語が飛ぶ・暗し・暑いのやうな單純な動詞や形容詞から成立つことがあるし、逆臣なりの如く名詞と助動詞から成立つことがある。又取らせるのやうに動詞と助動詞から成立つこともある。

月高く上る

副詞ヲ有スル述語

波の音頗る喧し。
天候幸に順なり。
この部屋は大層涼しい。

【百三十九】右の文例中**高く上る・頗る喧し・幸に順なり・大層涼しい**はいづれも述語である。かやうに述語が用言と之を限定する**高く・頗る・幸に・大層**といふやうな副詞の結びついたものから成立つことがある。

歳月は矢のごとく過ぎゆく。
姿はいつとしもなく消え去る。
心の底から喜んだ。

副詞句ヲ有スル述語

副詞節ヲ有スル述語

【百四十】右の文例中**矢のごとく過ぎゆく・いつとしもなく消え去る・心の底から喜んだ**はいづれも述語である。かやうに述語が動詞や形容詞等を限定する**矢のごとく・いつとしもなく・心の底から**といふやうな句の結びついたものから成立つことがある。かやうな句を**副詞句**といふ。

獨軍潮の寄するごとく襲ひ來れり。
妻は氣も絶ゆるばかり驚きぬ。
駿馬は力の續くかぎり駈け出した。

【百四十一】右の文例中**潮の寄するごとく襲ひ來れり・氣も絶ゆるばかり驚きぬ・力の續くかぎり駈け出した**はいづれも述語である。か

やうに述語が動詞や形容詞等を限定する潮の寄するごとく・氣も絶ゆるばかり・力の續くかぎりといふやうな文の結びついたものから成立つことがある。かやうな文を副詞節といふ。

副詞的修飾語

注意　動詞や形容詞を限定する副詞・副詞句及び副詞節を總稱して副詞的修飾語といふ。

練習

一　左の文例によつて副詞的修飾語を説明せよ。

1 妻はひたすら神に祈りぬ。
2 旅人はいかにも苦しさうに見える。
3 古城が屹然として聳えて居る。
4 百姓は汗水たらして働いて居る。
5 予は涙もつき果てんばかりに悲しみたり。
6 彼は志の貫徹するまで動かざりき。
7 妻は眼がまはるやうに働いて居る。

二　副詞句及び副詞節を用ゐて文例を作れ。

四　補足語

旅人草鞋をはく。
飛行機空を飛ぶ。
伊豆守老中となりぬ。
彼は某博士の家塾に入學したり。
猿が木から落ちた。

〔百四十二〕　右の文例における述語中、草鞋を・空を・老中と・某博士の家塾

補足語

に・木からは動作の目的又は標準を示すもので、これを補足語といふ。

注意　「櫻の花は予のもつとも好めるものなり。」「氷水が飲みたい。」「芝居は誰でも好きだ。」の「櫻の花は」「氷水が」「芝居は」は補足語である。國語では重きを置かれる補足語が主語と同じ形式を取るのが例である。

彼は名を太郎と呼ぶ。
父は子を旅行に伴ふ。
學校は生徒を來學年より收容すべし。
太郎が學校から遠足に行つた。
お花は子に名を次郎とつけた。

二ツ以上ノ補足語

補足語ノ成分

【百四十三】右の文例における「名を・太郎と」「子を・旅行に」「生徒を・來學年より」「學校から・遠足に」「子に・名を・次郎と」の如く、補足語を二つ以上重ねて用ゐることがある。

孔雀は美しき羽をもつ。
梅花馥郁たる香を放つ。
彼は寄せ來る波をじつとながめた。
兄は初對面の挨拶を述べた。
子供は魚のやうな調子で泳いでゐる。
人々はこの情厚き言葉に感じあひぬ。

【百四十四】右の文例における如く、補足語には主語の場合と同じく、形

容詞的修飾語の結びつくことがある。

練習

一　左の文例から補足語を摘出し、その成分を説明せよ。

1　夕月ほそく山の端にかゝる。
2　旅人木の下蔭に憩ふ。
3　八鹽の花が翠巒の中に咲き亂れて居る。
4　私は故郷で飴屋の吹いて來る唐人笛をきゝました。
5　ヨットが水漫々たる湖水の上に浮んでゐる。
6　子供は腹が痛いと泣いてゐる。
7　船長は波靜なる日を待つ。
8　彼は鷗の群れ飛ぶ光景を畫けり。

二　國語讀本から補足語を集め、その成分を説明せよ。

第二章　文の構成

一　單文

犬吠ゆ。
鐘聲幽なり。
雷雨たちまちにして至る。
僧鐘をつく。
空がよく晴れた。

【言四十五】　右の文例における如く、一個の主語と一個の述語から成立つものを**單文**といふ。

注意　左の如く主語が二個以上あつて述語一個、述語が二個以上あつて主語一個のことがあり、主語も述語も二個以上あることがある。しかし主語と述語の關係はたゞ一回成立つのみである。

山も川もある。　彼は書を讀み字を習ふ。

兄も弟も文學を好み法律を嫌ふ。

不備ナル單文

【百四十六】　單文には次のやうに主語や述語等の缺けて居るものがある。

身を立て道を行ひ名を後世にあぐ。

品物に手を觸るべからず。

一日の行程僅に里餘。

夢に友人を見る。

長いものに限る。

僕も行く積です。

心の中はいかに。

練習

一　左の文例について單文の構造を說明せよ。

1 雲間の月もやどるなり。

2 身はいつしか畫中の人となる。

3 老木亭々として高く聳ゆ。

4 賴朝、義經をして平氏を討たしむ。

5 春の花見・蕨取・秋の紅葉狩・耳狩・夏の涼み・冬の雪見は京都の特色なり。

6 兄も弟も文學を好む。
7 ビスマルクは常に乘馬に耽り喫煙を嗜みたり。
8 人に道を尋ねた。

二　國語讀本又は作文から單文の文例を集めよ。

二　複文

花咲く春は樂しきものなり。
時に風なき日もあり。
予は旅人の木蔭に憩ふを見たり。
彼は友人の住みし家を買ふ。
東京は人口多し。

【百四十七】右の文例における如く、主語・補足語・述語のいづれかに文の

複文

不備ナル複文

含まれて居るものを**複文**といふ。

【百四十八】複文には次のやうに主語や述語等の缺けて居るものがある。

風吹く日を選ばむ。
心身ともにいたく衰へたり。
文學の嗜ことに深し。
忠臣は孝子の門より出づといふ。
つねに心平ならざるを憂ふ。
雪の降る夜に尋ね行けり。
價高き品はいかに。

病の速に恢復せんことを希ふ。

練習

一　左の文例によりて複文の構造を説明せよ。

1 貧しきものは志却て固し。
2 文學の嗜深き人はまことに少し。
3 良藥口に苦しとは善き諺なり。
4 吹く風も春めくを覺えぬ。
5 國内靜平なる時に起業せよ。
6 陸奥は名所多き國ときく。
7 雨はげしく降る夜は訪ひ來る人もなし。
8 彼は度量頗る狹隘なり。

9 雨の降る晩に見ました。
10 畫工は胡蝶の舞ひ狂ふ狀を畫けり。

二　複文につき各種の文例を作れ。

三　重文

秋高く、馬肥ゆ。
砂白く、松青し。
東寺の塔は吾を待ちて立ち、鴨川の水は吾を迎へて歌ふ。
半ば帆を張りて出てゆく舟あり、櫓をあやつりて横ぎる舟あり。

【百四十九】右の文例における如く、文が二つ以上對等に連立するものを重文といふ。

注意　「雨降リテ風吹ク。」は二つの文が對等に連立するのであるから重文であるが、「雨降リテ地固マル。」「日暮レテ途遠シ」は二つの文が連立せず、一方の文が一方の原因を示すのである。かやうに對等に連立しない文の結びついたものを**合文**といふ。

合文

不備ナル重文合文

【百五十】　重文や合文には次ぎのやうに主語や述語等の缺けて居るものがある。

旅は道づれ世はなさけ。

我國は森林多く朝鮮は少し。

起きては食ひ醒めては飲む。

滿れば缺け奢れば滅ぶ。

客が皆揃つたがまだ持つて來ない。

日が暮れるのにまだ見えない。

練習

一　左の文例について重文及び合文の構造を說明せよ。

1 武人は武を談じ、歌人は歌を詠ず。

2 彼の人は度量狹隘にして、この人は品行方正ならず。

3 風吹けども寒さ甚しからず。

4 春は花なく秋は月なし。

5 賊軍攻め來り、官軍利あらず。

6 天氣清朗なれども、波高し。

7 兄は吏才に長じ、弟は文學の嗜深し。

8 家傾き門前草滋し。
9 昔はあつたが、今はない。
10 街路は四通八達し、大厦高樓は鱗次櫛比す。
11 天地たゞ平和、四望たゞ寂寞。
12 熱誠に勉強すれば、成功疑なし。

二　國語讀本から重文の文例を集めよ。

第三章　係結

夜は次第に更けゆきぬ。
風も吹かず、雨も降らず。
聲きくときぞ秋は悲しき。

係結
係辭
結辭

花や咲くらむ。
誰かある。
かくてこそ甲斐はありけれ。

【百五十一】右の文例における如く、助詞は・も・ぞ・や・か・こそを受けて文の終を結ぶ動詞・形容詞及び助動詞に一定の慣用がある。これを係結といふ。文における以上のやうな助詞を係辭、これを受けて文の終を結ぶ用言を結辭といふ。

夏は水涸る。
道路は小石多し。
今日も空しく暮れぬ。

は・もノ係結

酒も飲まず、茶も飲まず。

彼も論語を讀む。

【百五十二】右の文例における如く、助詞**は・も**を受ける場合には、動詞・形容詞及び助動詞の終止形で文の終を結ぶ例である。これを**は・もの係結**といふ。但し

水ゆるく流る。

おく霜の色いと白し。

秋風吹きそめぬ。

のやうに助詞「は」「も」なくして動詞・形容詞及び助動詞の終止形で文の終を結ぶこともある。

ぞ・や・かノ係結

残りなく散るぞめでたき。

一首の歌をぞ書きつけける。

夜や寒き、衣や薄き。

思ひや出づる。

何の仔細かあるべき。

誰か來つる。

柿本の人麿なむ歌の聖なりける。

岸の姫松いく代經ぬらむ。

【百五十三】右の文例における如く、助詞**ぞ・や・か・なむ**及び疑の意をあらはす**いく・たれ**等を受ける場合には動詞・形容詞及び助動詞の連體形で文の終を結ぶ例である。これを**ぞ・や・かの係結**といふ。

祝ふ今日こそ樂しけれ。

これこそ千秋の無念なれ。

物をこそ言はね、花にも心あるべし。

雨こそ降れ、風は寒からず。

【百五十四】　右の文例における如く、助詞**こそ**を受ける場合には動詞・形容詞及び助動詞の已然形で文の終を結ぶ例である。これを**こその係結**といふ。

こそノ係結

注意　「は・もの係」と「ぞ・や・かの係」又は「こその係」とを重ねて用ゐる場合には、「ぞ・や・かの係」か、又は「こその係」を受けて文の終を結ぶのが例である。但し「ぞ・や・かの係」と「こその係」とを重ねて用ゐるのは誤である。又「ぞ・や・かの係」や「こその係」を左の如く名詞やその他の言葉で受けて結ぶことがある。

年ふれどかはりもやらぬ名取川うき身ぞ今は瀬々の埋れ木。

小夜千鳥聲こそ近く鳴海潟傾ふく月に潮やみつらむ。

うちつけに思ひやいづとふる里の忍草してすれるなりけり。

練習

左の文例により係結の關係を説明せよ。

1 窓より西に月のかたぶくを見るこそ哀なれ。

2 春の花秋の紅葉いかで雪降埋みたる湖山の風景に比するを得べき。

3 千里の道は一歩より始る。

4 女は鏡・硯にこそ心の程は見ゆめれ。

5 今は何をかくし申すべき。
6 その人は貌より心なむまさりたりける。
7 夜や暗き道や惑へる。
8 いづくにかこよひは宿をかり衣日も夕暮の峯の嵐に
9 夢にこそ都のことも見るべきを袖に波こす千賀の鹽釜
10 迷ひこし夢路のやみを出でぬれば色こそよその墨染の袖

女子日本文法 終

附錄

文法上許容に關する事項

一、「居リ」「恨ム」「死ヌ」ヲ四段活用ノ動詞トシテ用ヰルモ妨ナシ

二、「シク・シ・シキ」活用ノ終止言ヲ「アシシ」「イサマシシ」ナド用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

三、過去ノ助動詞ノ「キ」ノ連體言ノ「シ」ヲ終止言ニ用ヰルモ妨ナシ

例　火災ハ二時間ノ長キニ亙リテ鎭火セザリシ
　　金融ノ靜謐ナリシ割合ニハ金利ノ引弛ヲ見ザリシ

四、「コトナリ」(異)ヲ「コトナレリ」「コトナリテ」「コトナリタリ」ト用ヰルモ妨ナシ

五、「ハヽセサス」トイフベキ場合ニ「セ」ヲ略スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　手習サス
　　周旋サス
　　賣買サス

六、「ヽヽセラル」トイフベキ場合ニ「ヽヽサル」ト用ヰル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　罪サル
　　評サル
　　解釋サル

七、「得シム」トイフベキ場合ニ「得セシム」ト用ヰルモ妨ナシ

例　最優等者ニノミ褒賞ヲ得セシム
　　上下貴賤ノ別ナク各其地方ニ安ンズルコトヲ得セシムベシ

八、佐行四段活用ノ動詞ヲ助動詞ノ「シ・シカ」ニ連ネテ「暮シシ時」「過シシカバ」ナドイフベキ場合ニ「暮セシ時」「過セシカバ」ナドトスルモ妨ナシ

例　唯一遍ノ通告ヲ爲セシニ止マレリ
　　攻擊開始ヨリ陷落マデ僅ニ五箇月ヲ費セシノミ

九、てにをはノ「ノ」ハ動詞、助動詞ノ連體言ヲ受ケテ名詞ニ連續スルモ妨ナシ

例　花ヲ見ルノ記

學齡兒童ヲ就學セシムルノ義務ヲ負フ
市町村會ノ議決ニ依ルノ限リニアラズ

十、疑ノてにをはノ「ヤ」ハ動詞、形容詞、助動詞の連體言ニ連續スルモ妨ナシ

例　有ルヤ
　　面白キヤ
　　父ニ似タルヤ母ニ似タルヤ

十一、てにをはノ「トモ」ノ動詞、使役ノ助動詞、及、受身ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　數百年ヲ經ルトモ
　　如何ニ批評セラルルトモ
　　强ヒテ之ヲ遵奉セシムルトモ

十二、てにをはノ「ト」ノ動詞、使役ノ助動詞、受身ノ助動詞、及、時ノ助動詞ノ連體言ニ連續スル習慣アルモノハ之ニ從フモ妨ナシ

例　月出ヅルト見エテ
　　嘲弄セラルヽト思ヒテ

終日業務ヲ取扱ハシムルトイフ

萬人皆其德ヲ稱ヘケルトゾ

十三、語句ヲ列擧スル場合ニ用ヰルてにをはノ「ト」ハ誤解ヲ生ゼザルトキニ限リ最終ノ語句ノ下ニ之ヲ省クモ妨ナシ

例　月ト花

宗教ト道德ノ關係

京都ト神戸ト長崎ヘ行ク

最終ノ「ト」ヲ省クトキハ誤解ヲ生ズベキ例

史記ト漢書㊦ノ列傳ヲ讀ムベシ

史記ト漢書ノ列傳㊦ヲ讀ムベシ

十四、上ニ疑ノ語アルトキニ下ニ疑ノてにをはノ「ヤ」ヲ置クモ妨ナシ

例　誰ニヤ問ハン

幾何ナルヤ

如何ナル故ニヤ

如何ニスベキヤ

十五、てにをはノ「モ」ハ誤解ヲ生ゼザル限リニ於テ「トモ」或ハ「ドモ」ノ如ク用ヰルモ妨ナシ

例　何等ノ事由アルモ(アリトモ)議場ニ入ルコトヲ許サズ

期限ハ今日ニ迫リタルモ(タレドモ)準備ハ未ダ成ラズ

經過ハ頗ル良好ナリシモ(シカドモ)昨日ヨリ聊カ疲勞ノ狀アリ

誤解ヲ生ズベキ例

請願書ハ會議ニ付スルモ(ストモ)之ヲ朗讀セズ

給金ハ低キモ(クトモ)(ケレドモ)應募者ハ多カルベシ

十六、「トイフ」トイフ語ノ代リニ「ナル」ヲ用ヰル習慣アル場合ハ之ニ從フモ妨ナシ

例　イハユル哺乳獸ナルモノ

顏回ナルモノアリ

上二段

	強	落	
	ヒ	チ	
	ヒ	チ	
	フ	ツ	
	フル	ツル	
	フレ	ツレ	
	ヒ	チ	
み	ひ	ち	
み	ひ	ち	
みる	ひる	ちる	
みる	ひる	ちる	
みれ	ひれ	ちれ	
み	ひ	ち	

上一段

附

錄

終

動詞の文語口語對照活用表（文語）（口語）

正格活

動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
四段活用													
咲	カ	キ	ク	ク	ケ	ケ	か	き	く	く	け	け	四段活用
貸	サ	シ	ス	ス	セ	セ	さ	し	す	す	せ	せ	
打	タ	チ	ツ	ツ	テ	テ	た	ち	つ	つ	て	て	
買	ハ	ヒ	フ	フ	ヘ	ヘ	は	ひ	ふ	ふ	へ	へ	
住	マ	ミ	ム	ム	メ	メ	ま	み	む	む	め	め	
借	ラ	リ	ル	ル	レ	レ	ら	り	る	る	れ	れ	
上一段活用													
射	イ	イ	イル	イル	イレ	イ	い	い	いる	いる	いれ	い	上一段活用
着	キ	キ	キル	キル	キレ	キ	き	き	きる	きる	きれ	き	
煮	ニ	ニ	ニル	ニル	ニレ	ニ	に	に	にる	にる	にれ	に	
干	ヒ	ヒ	ヒル	ヒル	ヒレ	ヒ	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひ	
見	ミ	ミ	ミル	ミル	ミレ	ミ	み	み	みる	みる	みれ	み	
用	ヰ	ヰ	ヰル	ヰル	ヰレ	ヰ	ゐ	ゐ	ゐる	ゐる	ゐれ	ゐ	
下一段活用													下一段活用
蹴	ケ	ケ	ケル	ケル	ケレ	ケ	け	け	ける	ける	けれ	け	
上二段活用													
盡	キ	キ	ク	クル	クレ	キ	き	き	きる	きる	きれ	き	上一段活用
落	チ	チ	ツ	ツル	ツレ	チ	ち	ち	ちる	ちる	ちれ	ち	
强	ヒ	ヒ	フ	フル	フレ	ヒ	ひ	ひ	ひる	ひる	ひれ	ひ	
恨	ミ	ミ	ム	ムル	ムレ	ミ	み	み	みる	みる	みれ	み	
老	イ	イ	ユ	ユル	ユレ	イ	い	い	いる	いる	いれ	い	
懲	リ	リ	ル	ルル	ルレ	リ	り	り	りる	りる	りれ	り	
得	エ	エ	ウ	ウル	ウレ	エ	え	え	える	える	えれ	え	

附錄終

形容詞の文語口語對照活用表（文語）（口語）

	久活用	志久活用
形容詞	遠	烈
將然形	ク	シク
連用形	ク	シク
終止形	シ	シ
連體形	キ	シキ
已然形	ケレ	シケレ
將然形	く	しく
連用形	く	しく
終止形	い	しい
連體形	い	しい
已然形	けれ	しけれ

正格活用

變格活用				下二段活用										上二段活用						下一段活用	上一段活用					上一段活用						四段活用					
ラ行變格活用	ナ行變格活用	サ行變格活用	カ行變格活用	植	荒	消	責	與	重	捨	寄	掛	得	懲	老	恨	强	落	盡	蹴	用	見	干	煮	着	射	借	住	買	打	待	切	入	煎	焼	切	入
在	死	爲	來	植	荒	消	責	與	重	捨	寄	掛	得	懲	老	恨	强	落	盡	蹴	用	見	干	煮	着	射	借	住	買	打	待	切	入	煎	焼	切	入
ラ	ナ	セ	コ	エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	リ	イ	ミ	ヒ	チ	キ	ケ	キ	ミ	ヒ	ニ	キ	イ	ラ	マ	ハ	タ	タ	キ	ル	ニ	ヤ	キ	ル
リ	ニ	シ	キ	エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	リ	イ	ミ	ヒ	チ	キ	ケ	キ	ミ	ヒ	ニ	キ	イ	リ	ミ	ヒ	チ	チ	キ	ル	ニ	ヤ	キ	ル
リ	ヌ	ス	ク	ウ	ル	ユ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ	ル	ユ	ム	フ	ツ	ク	ケル	キル	ミル	ヒル	ニル	キル	イル	ル	ム	フ	ツ	ツ	ク	ル	ニル	ヤル	キル	ル
ル	ヌル	スル	クル	ウル	ルル	ユル	ムル	フル	ヌル	ツル	スル	クル	ウル	ルル	ユル	ムル	フル	ツル	クル	ケル	キル	ミル	ヒル	ニル	キル	イル	ル	ム	フ	ツ	ツ	ク	ル	ニル	ヤル	キル	ル
レ	ヌレ	スレ	クレ	ウレ	ルレ	ユレ	ムレ	フレ	ヌレ	ツレ	スレ	クレ	ウレ	ルレ	ユレ	ムレ	フレ	ツレ	クレ	ケレ	キレ	ミレ	ヒレ	ニレ	キレ	イレ	レ	メ	ヘ	テ	テ	キ	レ	ニレ	ヤレ	キレ	レ
レ	ネ	セ	コ	エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ	リ	イ	ミ	ヒ	チ	キ	ケ	キ	ミ	ヒ	ニ	キ	イ	レ	メ	ヘ	テ	テ	キ	レ	ニ	ヤ	キ	レ
ら	な	しせ	こ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	り	い	み	ひ	ち	き	け	ね	み	ひ	に	き	い	ら	ま	は	た	た	き	る	に	や	き	る
り	に	し	き	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	り	い	み	ひ	ち	き	け	ね	み	ひ	に	き	い	り	み	ひ	ち	ち	き	る	に	や	き	る
る	ぬ	する	くる	ゑる	れる	える	める	へる	ねる	てる	せる	ける	える	りる	いる	みる	ひる	ちる	きる	ける	ねる	みる	ひる	にる	きる	いる	る	む	ふ	つ	つ	く	る	ぬ	や	く	る
る	ぬ	する	くる	ゑる	れる	える	める	へる	ねる	てる	せる	ける	える	りる	いる	みる	ひる	ちる	きる	ける	ねる	みる	ひる	にる	きる	いる	る	む	ふ	つ	つ	く	る	ぬ	や	く	る
れ	ね	すれ	くれ	ゑれ	れれ	えれ	めれ	へれ	ねれ	てれ	せれ	けれ	えれ	りれ	いれ	みれ	ひれ	ちれ	きれ	けれ	ねれ	みれ	ひれ	にれ	きれ	いれ	れ	め	へ	て	て	く	れ	ぬ	や	く	れ
れ	ね	しせ	こ	ゑ	れ	え	め	へ	ね	て	せ	け	え	り	い	み	ひ	ち	き	け	ね	み	ひ	に	き	い	れ	め	へ	て	て	く	れ	ぬ	や	く	れ
四段活用	四段活用	サ行變格活用	カ行變格活用	下一段活用										上一段活用						下一段活用	上一段活用					上一段活用						四段活用					

變格活用

正格活用

活

（し

ばば
や

（し）

て　たし

となや

ぞ　を

どら

動詞・形容詞と助動詞・助詞との連續表（文語）

動

	四段活用	上一段活用	下一段活用	上二段活用	下二段活用	カ行變格活用	サ行變格活用
	行	「射」	「蹴」	起	受	「來」	「爲」
將然形	か（じ） なばばまむずしする むやしむ	い らさ むす	け ばまむじずさ むやしむす	き ばまむじずさ むやしむす	け なばばなむじずさ むやしむす	こ（し）（しか） なばばなむじずさ むやしむす	せ（じ）（む） ばばなまむじずさ やしむす
連用形	き てたけたぬつけき ゝしむりり…そ	い けぬつけき	け たけたぬつけ むしむりり	き てたけたぬつけ なむゝしむりり…そ	け てたけたぬつけ なむゝしむりり…そ	き（し）（しか） てたけたぬつけ ゝしむりり	し てたけたぬつけ（き） ゝしむりり
終止形	く ととなやらめらまべし ともしりむじし	いる とな ともらめらまべし	ける らめらまべし しりむじし	く とな ともらめらまべし	く とな ともらめらまべし	く ととなやらめらまべし ともしりむじし	す ととなやらめらまべし ともしりむじし
連體形	く なり かぞをがかごとし かなぞをがかごとし	いる なり ぞをがかごとし なぞをがかごとし	ける なり ぞをがかごとし	くる なり ぞをがかごとし	くる なり ぞをがかごとし かなぞをがかごとし	くる なり ぞをがかごとし かなぞをがかごとし	する なり ぞをがかごとし かなぞをがかごとし
已然形	け りばど ども	いれ ば ど	けれ ば ど	くれ ば ど ども	くれ	くれ ば ど ども	すれ ば ど ども
命令形	け	い け よ	け よ	き よ	け	こ よ	せ よ

動詞・形容詞と助動詞・助詞との連續表（文語）

	動詞									形容詞	
	四段活用	上一段活用	上一段活用	下一段活用	上二段活用	下二段活用	カ行變格活用	サ行變格活用	ナ行變格活用	ラ行變格活用	久活用	志久活用
	行	射	蹴	起	受	來	爲	死	有	遠	寂
將然形	か（じ） なばばまむずしする むやしむ	い らさむする ばましじず なむや	け ばましじず なむや	き ばましじず なむや	け ばましじず なむや	こ（し）（しか） なばばなむじずさら むや…する …そ	せ（り）（しか） なばばなまむじずしさら むや…しむする …そ	な なばばまむじずしする むやしむ	ら なばばまむじずし むやしむ	く ば	く しく
連用形	き つてなたけたぬつけき ゝ…しむりり …そ	い けきつけり てたぬつ なむ	け たけたぬつけり しむり なむ…そ	き たけたぬつけり しむり なむ…そ	け たけたぬつけり しむり なむ…そ	き（し）（しか） つてたけたぬつけり ゝしむり	し つてたけたぬつけ（き）り ゝしむり	に つてなたけたつけき ゝ…しむりり …そ	り なつてなたけたぬつけき むゝ…しむりり …そ	く て とも	く しく
終止形	く ととなやらめらまべし ともしりむじし	いる けるべし とならむじ ともしりむ	く とならめらまべし ともしりむじ	く とならめらまべし ともしりむじ	く とならめらまべし ともしりむじ	く とならめらまべし ともしりむじ	す とならめらまべし ともしりむじ	ぬ とならめらまべし ともしりむじ	り とや とも	し と や	し しく
連體形	く なりごとし をがかぞ なかぞ	いる なりごとし をがかぞ なかぞ	ける なりごとし をがかぞ なかぞ	くる なりごとし をがかぞ なかぞ	くる なりごとし をがかぞ なかぞ	くる なりごとし をがかぞ なかぞ	する なりごとし をがかぞ なかぞ	ぬる なりごとし をがかぞ なかぞ	る なりごとし をがからめらまべし なしりむじし	き なりごとし をがかぞ なかぞ	き しき
已然形	け ばどり ども	いれ ば ども	けれ ば ども	くれ ば ども	くれ ば ども	くれ ば ども	すれ ば ども	ぬれ ば ども	れ ば ども	けれ ば ども	けれ しけれ
命令形	け	い よ	け よ	き よ	け	こ よ	せ よ	ね	れ		

ず	じ	まじ	ごとし
ず（ば）		まじく（ば）	ごとく（ば）
ず（て）		まじく（て・とも）	ごとく（にて）
ず（と・や・とも）	じ（と・や・とも）	まじ（と・や）	ごとし（と・や）
ぬ（か・がか・なり・をぞ・かな）	じ（か）	まじき（なり・かが・をぞ）	ごとき（なり・かを・ぞ）
ね（ば・ど・ども）	じ	まじけれ（ば・ど・ども）	

助動詞と助動詞・助詞との連續表（文語）

助動詞	將然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
る らる	れ られ なばばむまじずしむ むやしし	れ られ つてなたけたぬつけき ゝ…そしむりり	る らる ととなや らめらまべし ともしりむじし	るゝ らるゝ かなぞをがかなり	るれ らるれ どば ども	れ られ よ
す さす しむ	せ させ しめ なばばまむじずらる むやしし	せ させ しめ つてなたけたぬつけき ゝ…そしむりり	す さす しむ ととなや らめらまべし ともしりむじし	する さする しむる かなぞをがかなり	すれ さすれ しむれ どば ども	せ させ しめ よ
なり	なら ばましむず	なり せばけむつけり	なり とも	なる かなぞをがからめらべし なしりむし	なれ どば ども	なれ よ
べし	べく ば	べく とも	べし とも	べき かなぞをがかなり	べけれ どば ども	
らむ			らむ とも	らむ かなぞをかなり	らめ どや ども	
めり			めり とも	める かなぞをがかなり	めれ どば ども	
まし			まし や	まし を	ましか どば ども	
たし	たく ば	たく とも	たし とも	たき かなぞをがかなり	たけれ どば ども	

しむ	しめ（なむ）	しめ（てつゝ）	しむ	なり	なら（ばましむず）	なり（せばむけつけり）	なり（とも）	なる（かなぞをがからめらべしむしり）	なれ（ども）	なれ（よ）	べし	べく（ば）	べく（とも）	べし（とも）	べき（かなぞをがかなり）	べけれ（ども）	
らむ				べし	べく（ば）	べく（とも）	べし（とも）	べき（かなぞをがかなり）	べけれ（ども）		らむ			らむ（とも）	らむ（ぞをか）	らめ（ども）	
めり				らむ			らむ（とも）	らむ（とも）	らめ（ども）		めり			めり（とも）	める（かなぞをがか）	めれ（ども）	
まし				めり			めり（とも）	めり（とも）	めれ（ども）		まし			まし（や）	まし（を）	ましか（ども）	
たし	たく（ば）	たく（とも）	たし	まし	たし（とも）	たし（とも）	たし（とも）	たき（かなぞをがかなり）	たけれ（ども）		き			き（とも）	し（かなぞをがかなり）	しか（ども）	
き			き	たし	き（とも）	き（とも）	き（とも）	し	しか（ども）		け			け（とも）	ける（かなぞをがからしむなり）	けれ（ども）	
けり	（けら）	（けり）	けり	き	け（とも）	け（とも）	け（とも）	ける（かなぞをがからしむなり）	けれ（ども）		り			り（とも）	る（かなぞをかからしむなり）	れ（ども）	
つ	て（ばましむ）	に（けむけりき）	つ	け	つ（とも）	つ（とも）	つ（とも）	つる（かなぞをがかなり）	つれ（ども）		ぬ			ぬ（とも）	ぬる（かなぞをがかなり）	ぬれ（ども）	
たり	たら（ばましむず）	たり（けむつけりき）	たり	つ	たり（とも）	たり（とも）	たり（とも）	たる（かなぞをがからしむなり）	たれ（ども）		む			む（とも）	む（かなぞをかなり）	め（どもや）	
り	（ら）	（り）	り	ぬ	り（とも）	り（とも）	り（とも）	る（かなぞをかからしむなり）	（れ）（ども）		む			む（とも）	む（かなぞをかなり）	め（どもや）	
ず	ず（ば）	ず（て）	ず	て	ず（とも）	ず（とも）	ず（とも）	ぬ（かなぞをがかなり）	ね（ども）		ず			ず（とも）	ぬ（かなぞをがかなり）	ね（ども）	
じ			じ	ず	じ（とも）	じ（とも）	じ（とも）	じ（か）	じ		じ			じ（とも）	じ（か）	じ	
まじ	まじく（ば）	まじく（て）	まじ	じ	まじ（やと）	まじ（やと）	まじ（やと）	まじき（ぞをがかなり）	まじけれ（ども）		まじ			まじ（やと）	まじき（ぞをかなり）	まじけれ（ども）	
ごとし	ごとく（ば）	ごとく（にて）	ごとし	まじ	ごとし（やと）	ごとし（やと）	ごとし（やと）	ごとき（ぞをかなり）			ごとし			ごとし（やと）	ごとき（ぞをかなり）		

文部省檢定濟
昭和四年一月八日　高等女學校國語科教科用

大正七年九月廿七日印刷
大正七年十二月八日訂正再版發行
大正十年十月廿七日修正三版發行
昭和三年十二月十七日修正八版印刷
昭和三年十二月二十日修正八版發行
大正十二年一月十五日修正四版發行
大正十四年九月廿八日修正五版發行
大正十四年十二月一日修正六版發行
昭和三年八月十三日修正七版發行

定價　金八十一錢

著作者　東京市神田區通神保町六番地　保科孝一
發行者　東京市神田區通神保町六番地　上原才一郎
印刷者　東京市神田區通神保町六番地　山崎與吉
發行所　光風館書店
（電話神田三〇八七番）
（振替口座東京三二七番）

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直ちに御送附可致候

（東京秀英舍印刷）

女子日本文法

三D 長村耕子

KŌFŪKAN
廣島大学図書
2000045710